Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture

宮崎県立西都原考古博物館

研究紀要

第 20号

犬木　　努
西都原 169 号墳出土船形埴輪の再検討
－西都原古墳群で出土した「二つ」の船形埴輪とその学史的経緯－ …… 1

今塩屋毅行・日髙　広人・後藤　清隆
酒元ノ上横穴墓群内の円墳出土遺物（概要） …… 15

中川　朋美・田村　光平・金田　明大・野下　浩司・中尾　央
西都原考古博物館所蔵古人骨の分析
：受傷痕跡所見および幾何学的形態測定学による３Ｄデータの解析
…… 25

吉本　正典
宮崎平野部の中世居館
－出現と展開および歴史的背景－ …… 41

●宮崎県立西都原考古博物館　研究紀要　第20号
2024・3
宮崎県立西都原考古博物館

序

2023（令和５）年度の西都原考古博物館職員による調査・研究の成果について、「研究紀要第20号」としてこのたび刊行いたしました。

今年度、当館職員がそれぞれ設定したテーマについて、資料収集、調査分析等を行った研究成果をとりまとめたものです。

西都原古墳群では1912（大正元）年、我が国最初の本格的な考古学術調査が行われましたが、以降の長い歴史の中で、当館は本県考古学の教育・研究の中核施設として、西都原をはじめ県内各地で調査研究を行い、その成果を蓄積してきたところです。

今年度におきましても、調査･研究における県内外の専門家の招聘、館外の様々な方々との連携の下での遺跡発掘や各種の展示会、講座等を行ってまいりました。

このような中、令和２年からのコロナ禍の影響で減少した来館者につきましては、徐々に回復しつつある状況ではありますが、令和６年度に当館は開館２０周年を迎えます。

今後も調査・研究業務へ注力するとともに、地域活力の向上に寄与する博物館として、展示や来館者サービスの一層の向上に取り組んでまいります。

ご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

刊行にあたりまして、寄稿並びに資料・情報の提供、指導・助言をいただきました皆様方に心より厚くお礼を申し上げます。

2024（令和６）年３月31日

宮崎県立西都原考古博物館　館長　岩切喜郎

西都原 169 号墳出土船形埴輪の再検討

－西都原古墳群で出土した「二つ」の船形埴輪とその学史的経緯－

犬木　努

１　はじめに

大正年間の発掘調査（以下、「大正調査」と略記）において、西都原170号墳（註１）で出土した船形埴輪［東京国立博物館所蔵］は、1957（昭和32）年、国の重要文化財に指定され、長らく中学校や高校の日本史の教科書等にも掲載されていたことから（犬木2014c）、同種埴輪の代表例として良く知られているが、平成年間の発掘調査（以下、「平成調査」と略記）において、西都原170号墳に隣接する同169号墳から、「もう一つ」の船形埴輪が出土していること（犬木編2010）はあまり知られていない。

本稿では、西都原古墳群から出土した「二つ」の船形埴輪―「西都原170号墳出土船形埴輪」と「西都原169号墳出土船形埴輪」―をめぐる学史的経緯を簡単に整理するとともに、「西都原169号墳出土船形埴輪」についての基礎情報を提示することを目的とする。

２　大正期における西都原169号墳・170号墳・171号墳の発掘調査

1912（大正元）年から1927（同６）年にかけて、西都原古墳群の発掘調査が実施されている（第１次調査～第６次調査）。東京帝国大学、京都帝国大学、宮内省、東京帝室博物館などから錚々たる研究者たちが参加しており、日本で最初の学術的な古墳発掘調査として夙に知られている（斎藤1963・1982）。

各調査の成果については宮崎県から発掘調査報告書が刊行されている（宮崎県1915・1917・1918・1926）（註２）。古墳研究の黎明期として致し方ないとはいえ、これらの報告書には、古墳名の混乱などが少なからず看取され（註３）、西都原古墳群出土船形埴輪をめぐる学史的「混乱」の遠因ともなっている（犬木2015ｂ）。

ここで、西都原古墳群第１次調査（1912（大正元）年12月～ 1913（大正２）年１月）の進行状況について確認しておきたい。発掘調査報告書の記述や『日州新聞』の記事の内容等（犬木2014b）を悉皆的・総合的に検討した結果、第１次調査における西都原169号墳（＝110号墳［旧］）・170号墳（＝111号墳［旧］）・171号墳（＝112号墳［旧］）の発掘調査の進行状況は、図１のように整理することができる（犬木2015a）。

男狭穂塚古墳・女狭穂塚古墳は、1895（明治28）年の時点で既に「御陵墓参考地」に指定されており、「御聖蹟」である両古墳を取り巻くように立地する西都原169号墳・170号墳・171号墳については、「御聖蹟」に「付随」する古墳として、当初から増田于信（宮内省御用掛;1862年生）および関保之助（東京帝室博物館嘱託；1868年生）の二人が担当する筈であったと思われるが、増田・関が最初に着手した169号墳において、存外に多量の形象埴輪・円筒埴輪が出土して、当初の予定以上の日数を費やすことになったため、51号墳（17号墳［旧］）・205号墳（201号墳［旧］）・207号墳（200号墳［旧］）の調査を逸早く終えた濱田耕作（京都帝国大学文科大学講師；1881年生）および柴田常恵（東京帝国大学理科大学助手;1877年生）が、急遽171号墳の発掘調査を担当することになったものと推測される（犬

木2015b)。

このような現場担当者の「急な変更」に伴って、発掘調査報告書の執筆担当者も変更され、発掘調査の終了後、西都原169号墳・170号墳出土遺物は東京帝室博物館、同171号墳出土遺物は京都帝国大学に送付される。現在、「大正調査」出土遺物のうち、西都原169号墳・170号墳出土遺物が東京国立博物館、同171号墳出土遺物が京都大学総合博物館に所蔵されているのは、上記のような経緯による。

３　西都原古墳群「大正調査」出土埴輪の「その後」

第１次調査において、西都原169号墳・170号墳・171号墳の発掘調査は、1913（大正２）年１月４日（土）には終了し（図１）。出土遺物の荷造り作業は、１月６日（月）午前中、関保之助・今西龍・三浦敏の３名により行われ（註４）、２月７日（金）には、東京帝室博物館（関保之助宛）に出土遺物６箱、京都帝国大学（濱田耕作宛）に３箱、宮内省京都出張所（増田于信宛）に１箱が発送されている（註５）。

東京帝室博物館に送付された西都原169号墳・170号墳出土遺物６箱のうち、埴輪については、それから20年程の間、未整理の状態でそのまま保管されていたようである。その後、東京帝室博物館鑑査官の後藤守一が、群馬県赤堀茶臼山古墳出土埴輪［1929（昭和４）年発掘調査］の整理作業を進める過程で、収蔵庫に眠っていた西都原古墳群出土「埴輪片」の中から船形埴輪を「発見」したのは1932（昭和７）年夏のことである（後藤守一1935a)。おそらく、西都原古墳群出土「埴輪片」の中から、子持家形埴輪を「発見」したのもほぼ同時期と思われる（犬木2015b)。

ただし、後藤によれば、「二十余年を未整理の儘放置してあった」ため、「包装紙にも破れが出て居り、彼此の混交を来したものが少なくない」ため、「本埴輪舟を第百十号墳からのものと決定するに多少の躊躇はあるが、関（保之助―筆者註―）氏の記憶にもこれを第百十号墳のものとされて居り、又包装紙にも第百十号墳とあるものゝ群よりこれを摘出したのであるから、これを決定した」とのことである（後藤1935a：p.23)。当初、後藤自身、この船形埴輪の帰属古墳について若干の「躊躇」を抱いていたことを示すが、その後、「西都原169号墳出土」という後藤の「判断」のみが独り歩きすることになる（註６)。なお、子持家形埴輪および船形埴輪以外の埴輪については、昭和後期に冑形埴輪や短甲形埴輪などが復元されているが、その他多数の形象埴輪片の整理・検討作業が行われるのは、平成期になってからである。

一方、京都帝国大学考古学研究室に送付された出土遺物３箱のうち、西都原171号墳出土埴輪については、発掘調査の「十余年後」に末永雅雄によって短甲形埴輪の復元作業が行われ（濱田1930、p.271)、末永雅雄の著書『日本上代の甲冑』にも同埴輪の写真が掲載されている（末永1934、図版第76)。西都原171号墳で出土した、その他多数の形象埴輪片の整理・検討作業が行われるのは、ようやく平成期になってからである（第５節参照、高橋1993)。

４　西都原169号墳・170号墳・171号墳の「再発掘」―史跡整備に伴う「平成調査」の開始―

平成期（1990年代）に入ると、西都原古墳群の史跡整備事業が開始され、西都原古墳群の発掘調査が「再開」される。宮崎県教育委員会が調査主体となり、1998年度から2003年度に西都原169号墳、2004・2005年度に同170号墳、1998年度から2000年度に同171号墳の発掘調査が実施された。それぞれ

表１　西都原古墳群第１次調査における各調査員の担当古墳

西暦・元号	調査日	黒板勝美 東京帝国大学文科大学助教授	今西 龍 東京帝国大学文科大学副手	三浦 敏 宮崎県史蹟調査員	喜田貞吉 京都帝国大学講師	坂口 昻 京都帝国大学文科大学教授	濱田耕作 京都帝国大学文科大学講師	柴田常恵 東京帝国大学理科大学助手	増田于信 宮内省御用掛		関保之助 東京帝室博物館嘱託		備考
一九一二年・大正元年													申告祭
	12/25（水）	11号墳	11号墳	11号墳	11号墳	17号墳	17号墳	17号墳	110号墳		110号墳		
	12/26（木）	11号墳	11号墳	11号墳	11号墳	17号墳	17号墳 201号墳？ 200号墳	17号墳 201号墳 200号墳	110号墳		110号墳		
	12/27（金）	11号墳 21号墳	11号墳 21号墳	11号墳 21号墳			200号墳 112号墳	200号墳 112号墳	110号墳		110号墳		
	12/28												雨天中止
	12/29（日）	21号墳	21号墳	21号墳			112号墳	112号墳	110号墳	111号墳	110号墳	111号墳	
	12/30（月）		21号墳	21号墳			112号墳	112号墳	110号墳	111号墳	110号墳	111号墳	
	12/31												
一九一三年・大正二年	１／１												作業なし
	１／２（木）												
								112･21号	111号墳				
	１／３（金）	21号墳	21号墳	21号墳				？	111号墳		111号墳		
	１／４（土）	21号墳	21号墳	21号墳				？	110号墳	111号墳	110号墳	111号墳	周辺古墳等視察
	１／５（日）	21号墳	21号墳	21号墳									
	１／６（月）		21号墳										
⟪参考⟫報告書執筆担当箇所（宮崎県1915）			11号墳 21号墳 [25号墳] [26号墳] [29号墳] [無号墳]				17号墳 112号墳	112号墳 200号墳 201号墳			110号墳 111号墳		

【凡例】
・本表は、各種資料に基づき、西都原古墳群第一次調査における各調査員の「担当古墳」（調査参加古墳）について、現時点で確認し得る基礎情報を時間順に整理したものである。
・作業時間帯については、午前および午後をそれぞれ二分割し、便宜的に一日を四分割している。作業休止日および中止日については、一日を一行で示し、薄い「網掛け」で表示した。
・各調査員が発掘作業に参加していない日にちおよび時間帯は濃い「網掛け」で表示した。
・各古墳の発掘調査実施期間を「太線」で囲んでいる。
・古墳名はいずれも旧番号を用いる。
・各調査員の所属・肩書は、調査古墳に埋置された「碑石」の文面に準拠した。
・旧21号墳の陪塚４基については細別せず、旧21号墳に含めている。

墳丘および周溝の調査のほか、170号墳・171号墳では大正期の発掘調査坑の再発掘も行われている。

西都原169号墳の発掘調査では、墳丘突出部の南側周溝内から船形埴輪の破片が出土しており、整理作業の最終段階で、船形埴輪であることが確定し、報告書（遺物編）に掲載されている（犬木編2010）。

一方、西都原170号墳の発掘調査では、墳頂部の大正調査坑の埋土内から、重要文化財（東京国立博物館所蔵）の船形埴輪に接合する破片や同一個体であることが確実な破片が出土し、これも報告書（遺物編）に掲載されている（犬木編2010）。また、子持家形埴輪（重要文化財、東京国立博物館所蔵）についても、同170号墳墳頂部の大正調査坑の埋土内から同一個体であることが確実な破片が出土しており、同古墳に帰属することが確定する（同前）。

西都原古墳群出土の船形埴輪（重要文化財・東京国立博物館所蔵）については、石川悦雄が、「舟形埴輪について（中略）必ずしも169号墳と170号墳の出土品の区別が確実ではなく、170号墳の遺物出土状態の写真に見られる細長い埴輪があるいは舟形埴輪なのかもしれない」と述べ、逸早く疑義を呈していたが（石川1988、p.65）（註７）、平成の発掘調査を通じて、当該船形埴輪（重要文化財・東京国立博物館所蔵）および子持家形埴輪（同前）が西都原170号墳に帰属することが確実となる。

５ 「大正調査」出土埴輪と「平成調査」出土埴輪の接合関係の確認

上記の通り、平成の発掘調査を通じて、東京国立博物館に所蔵されている西都原古墳群出土の船形埴輪（重要文化財）および子持家形埴輪（同前）の帰属古墳が西都原170号墳であることがようやく確定したわけであるが、それとは別に、同博物館に所蔵されている他の形象埴輪類の帰属をどう考えるのか、という課題が未決着のまま残されることとなった。

東京国立博物館に所蔵されている西都原古墳群出土埴輪のうち、船形埴輪・子持家形埴輪・甲冑形埴輪以外の破片類についてはほぼ未整理のまま残されていたが、1980年代末から1990年代にかけて、『宮崎県史』（宮崎県1993）編纂に伴う関連資料調査の一環として、東京国立博物館において基礎的な整理作業が実施されている。

一方、西都原169号墳では、「平成の発掘調査」において、多数の形象埴輪片が出土したため、整理作業の過程で、上記の「大正調査」出土形象埴輪と「平成調査」出土形象埴輪の接合関係を確認することになった。宮崎県立西都原考古博物館において両者の接合作業が行われた結果、盾形・高杯形・靭形・冑形・短甲形埴輪において、両者の間に接合関係が確認された（犬木編2010）。この結果、東京国立博物館に所蔵されている西都原古墳群出土埴輪のうち、船形埴輪・子持家形埴輪以外の形象埴輪片については、全て西都原169号墳に帰属することが確定した（犬木2010）。

一方、西都原171号墳については、平成調査の開始に先立って、『宮崎県史』編纂事業の一環として、京都大学総合博物館に所蔵されてきた西都原171号墳出土埴輪の整理作業および図化作業が行われている（高橋1993）。その後、西都原171号墳「平成調査」の報告書作成作業の一環として、宮崎県立西都原考古博物館において、「大正調査」出土埴輪および「平成調査」出土埴輪の接合関係が確認されている（註８）。

なお、西都原169号墳出土埴輪（「平成調査」）の整理作業の過程で、京都大学総合博物館所蔵「西

表２　西都原169号墳出土船形埴輪の接合状況および出土地点

報告書(遺物編)		総括報告書	本稿		各破片の出土トレンチ・出土調査区	
埴輪No.	器種				略号	名称
205	—	No.1	接　合	図1 図2	２ＳＣ区	２区周溝Ｃ区
206	—				２ＳＢ区	２区周溝Ｂ区
207	—				２ＳＣ区	２区周溝Ｃ区
208	—				２ＳＣ区	２区周溝Ｃ区
313	船形				10Ｔ	10トレンチ
202	—	No.2			２ＳＣ区	２区周溝Ｃ区
304	船形				９Ｔ/10Ｔ	９トレンチと10トレンチの間
315	船形				10Ｔ/11Ｔ	10トレンチと11トレンチの間
317	船形				９Ｔ/10Ｔ	９トレンチと10トレンチの間
298	船形	No.3			２ＳＣ区	２区周溝Ｃ区
314	船形				10Ｔ/11Ｔ	10トレンチと11トレンチの間
301	船形	—			９Ｔ/10Ｔ、２ＳＢ区	
309	船形	—			２ＳＢ区	２区周溝Ｂ区
311	船形	—			２ＳＢ区	２区周溝Ｂ区
296	船形	—	接点なし		10Ｔ	10トレンチ
297	船形	—	接点なし	図3-1	２ＳＣ区	２区周溝Ｃ区
299	船形	—	接点なし	図3-7	—	—
300	船形	—	接点なし	図3-2	２ＳＢ区	２区周溝Ｂ区
302	船形	—	接点なし	図3-3	９Ｔ/10Ｔ	９トレンチと10トレンチの間
303	船形	—	接点なし	図3-4	２ＳＢ区	２区周溝Ｂ区
308	船形	—	接点なし	図3-5	２ＳＢ区	２区周溝Ｂ区
312	船形	—	接点なし	図3-6	２ＳＢ区	２区周溝Ｂ区
316	船形	—	接点なし	図3-8	２ＳＢ区	２区周溝Ｂ区

都原171号墳出土埴輪」（高橋1993）のなかに、東京国立博物館所蔵の「西都原古墳群」出土形象埴輪および、平成調査で西都原169号墳から出土した形象埴輪と接合する破片が含まれていることが判明した（犬木編2010、p.69）。すなわちこれは、京都大学総合博物館に保管されている埴輪の中に、「西都原171号墳出土埴輪」と「西都原169号墳出土埴輪」の両者が含まれていることを意味していたが、仔細に検討すると、両者は注記番号によって区別できるため、現在、京都大学所蔵埴輪のうち、「西都原169号墳出土」と判断される埴輪は、盾形埴輪片および冑形埴輪片など一部に限定されることが判明した（犬木2015b、p.100）。おそらく、「大正調査」（第１次調査）の終了後、慌ただしく荷造りする過程で（前述）、本来、東京帝室博物館に送付する筈だった「西都原169号墳出土埴輪」の一部が、「西都原171号墳出土埴輪」とともに京都帝国大学に送付されたものと推測される。

６　西都原169号墳で出土した「もう一つ」の船形埴輪（表２）

西都原169号墳の報告書には、船形埴輪の破片合計22点の実測図が掲載されている（犬木編2010、第34図：埴輪No.296 ～No.317）。

報告書の刊行後、宮崎県立西都原考古博物館においてあらためて確認作業を行った結果、報告書では「家形埴輪」として図化した幾つかの破片が、当該船形埴輪片と接合したため、『西都原古墳群総括報告書』では、追加接合後の状況を示した実測図を掲載している（犬木2015b：第12図）。

その後、同博物館において、未接合破片の点検作業を行ったところ、さらに数点の破片が接合することが判明した。その結果、船形埴輪先端部の形状・構造の全体像を復元することが可能になったため、今回、同船形埴輪の実測図を新たに作成・提示する次第である（図１・図２）。

なお、西都原169号墳の発掘調査報告書（犬木編2010）から『西都原古墳群総括報告書』（宮崎県教育委員会2015）を経て本稿に至る、当該船形埴輪片の接合作業の進展状況を表２にまとめている。

当該船形埴輪片の接合・再検討作業を進める過程で、当初、船形埴輪として認識していなかった破片５点（埴輪No.202・No.205 ～No.208）が船形埴輪の一部であることが判明した一方、当初船形埴輪と

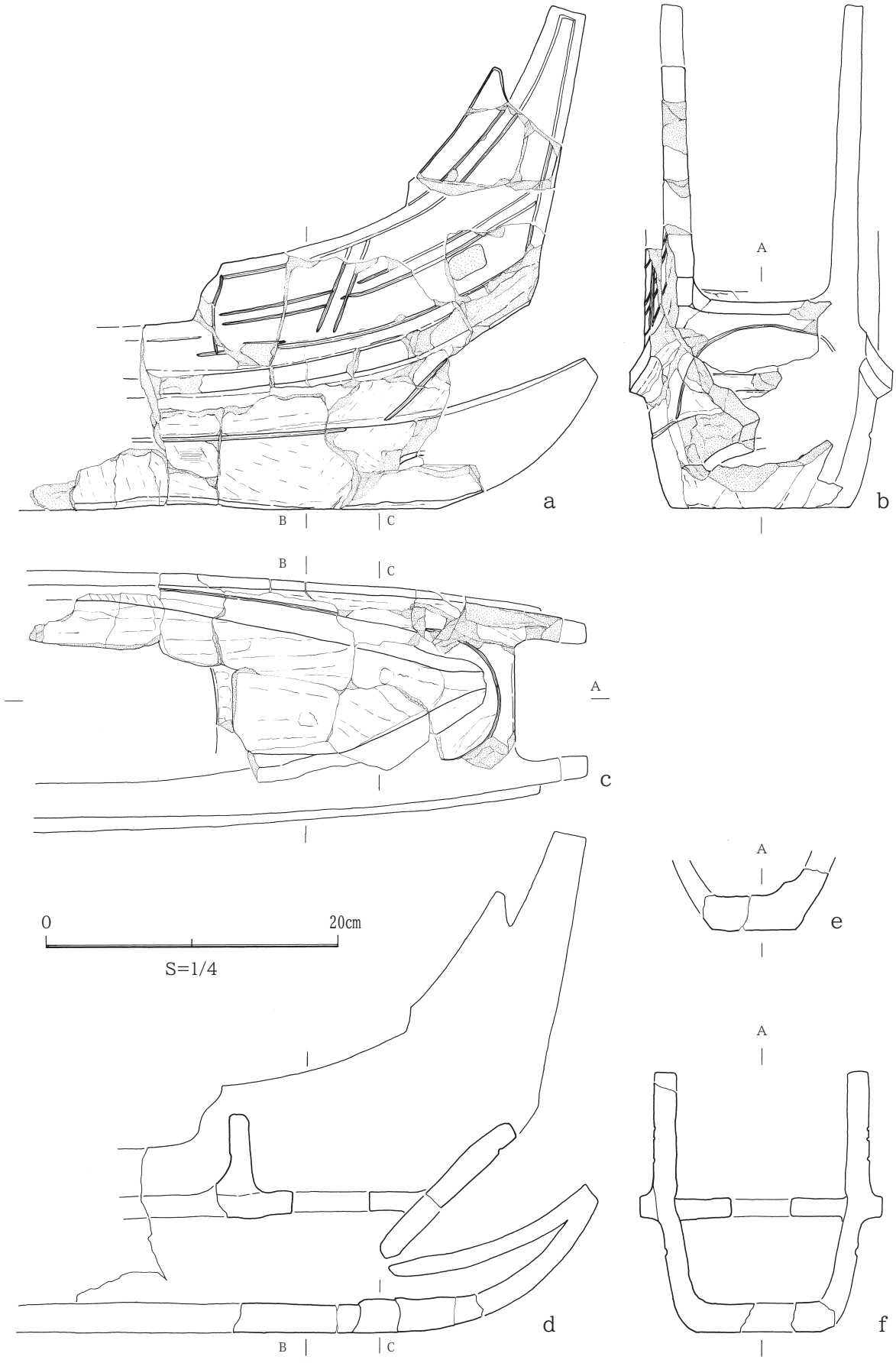


図１　西都原 169 号墳出土船形埴輪実測図（１）

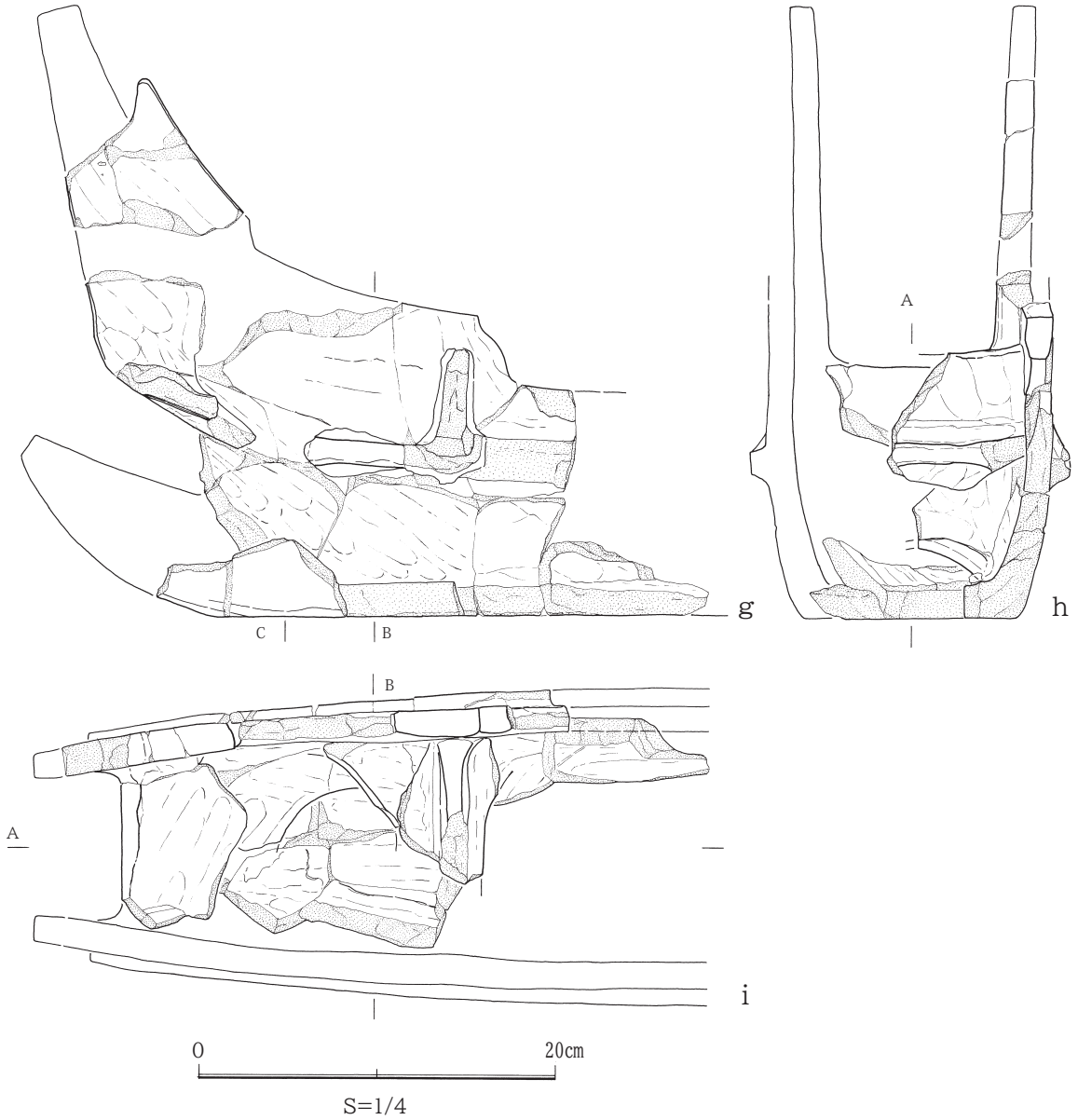


図２　西都原 169 号墳出土船形埴輪実測図（２）

して認識していた破片の一部は、船形埴輪以外の可能性が高くなったため、表２から除外している（埴輪№305 ～№307・№310）。

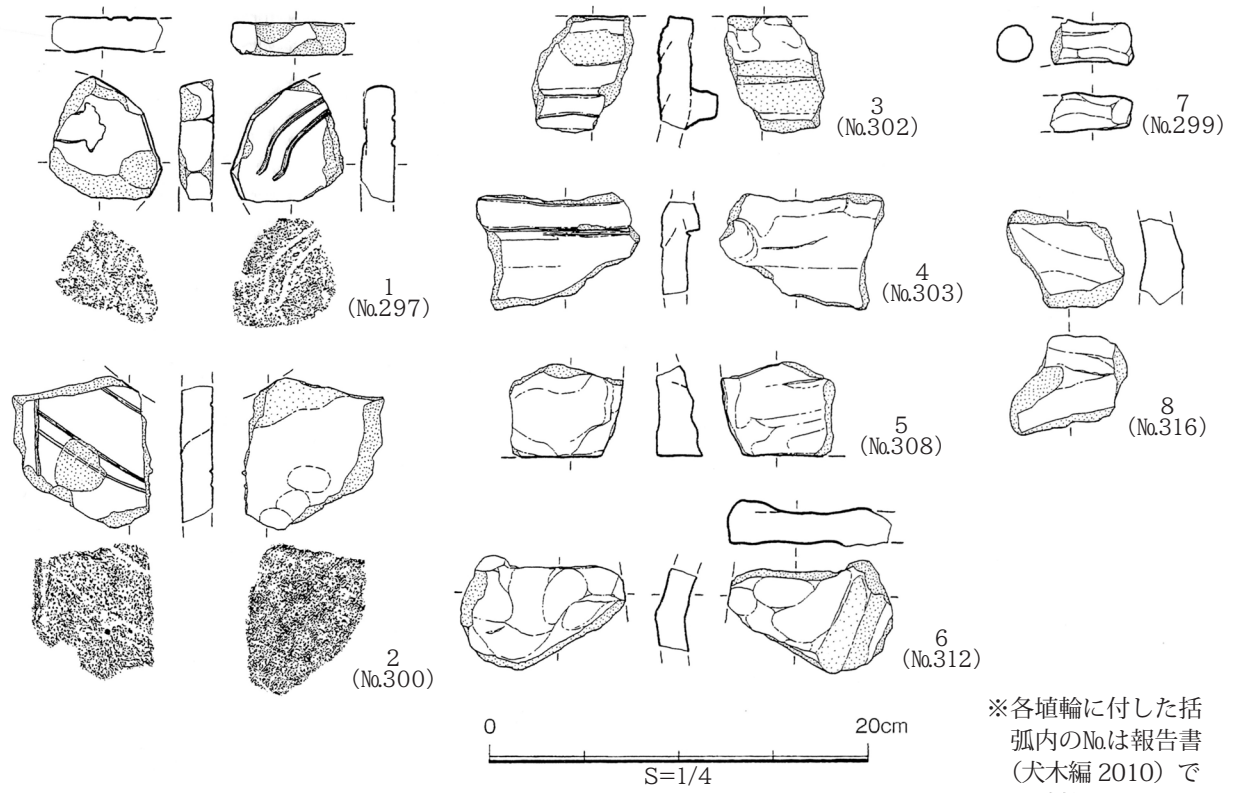
今回、図１・図２に示した船形埴輪「船端部」（註９）に接合しなかった破片については図３に示す。図１～図３および表２に示した資料が、現時点での西都原169号墳出土船形埴輪の総体である。

７　西都原169号墳出土船形埴輪の概要（図１～図３）

『西都原古墳群総括報告書』（宮崎県教育委員会2015）以降の検討作業および接合作業の結果も踏まえて、当該船形埴輪の概要について記述する。

形式　準構造船を象った、いわゆる「二股式」の船形埴輪である（註10）。

構造　「船底部」の両側面（左右）の上部に舷側板がのり、「船端部」では、外方に延びる「船底部」の上部に、左右の舷側板を繋ぐように斜位の「竪板」（「波切板」）が表現される。「竪板」外面の上部



※各埴輪に付した括弧内のNo.は報告書（犬木編 2010）での埴輪No.を示す。

図３　西都原 169 号墳出土船形埴輪実測図（３）

には、線刻による半円形の弧線の表現が見られる。舷側板は、突帯によって上下に分割され(註11)、「船底部」と「舷側板下部」はやや太めの沈線で区分される。「船底部」の下面は平端面をなし、「船底部」の側面は緩やかに立ち上がり、ほぼ直立する舷側板に接続する。

舷側板上端面は、中央ではほぼ水平をなすが、途中に緩やかなＳ字状の段を有し、船端に向かって大きく高さを増し、「飾り板部」につながる。「飾り板部」の左上部には「ヒレ状突起」が表現され、「飾り板部」と「ヒレ状突起」は刻線で区画される。「飾り板部」には、外形に並行する線刻を施したのち、その内側にも線刻を施す。向かってやや左寄りに右上がりの「平行線」を入れたのち、その左右の区画には、上記の「平行線」に交差するように「平行線」を施す。

「飾り板部」の外面には、概略長方形を呈する、いわゆる「板状貫」の剝離痕が残存し、「飾り板部」の外面に貼付されていたと思われる「棒状貫」の破片（図３－７）も遺存するので、本埴輪には、本来、「飾り板部」を貫通する「板状貫」と「棒状貫」が表現されていたものと見做される。

「船底部」の先端部（二股に分かれた先の部分）は、断面逆台形を呈する「底部」の上面を粘土紐で塞ぎ、中空に作られている。この他、左右の舷側板を水平につなぐ「船板」や、「船板」に直交する「隔壁」の表現も看取されるが、全て剝離している。

製作技法　「船底部」には、船の主軸方向（以下、「主軸方向」と略称）に沿って粘土紐接合痕が僅かに看取されるほか、調整方向や破片の破断状況からも、複数の粘土紐を用いて成形されていると推測される。舷側板にも水平方向の粘土紐接合痕が看取できることから、水平方向の粘土紐を積み上げて成形していることが窺える（註12）。

遺存状況　全形の復元はできないが、「船端部」については破片の遺存状況が比較的良好である。「飾

り板」先端部の破片は接合しないが、位置はほぼ特定されるので、「船端部」の高さの復元は可能である。反対面あるいは反対側の「飾り板部」（図３－１・２）、「船端部」に接合しない舷側板（図３－３・４）、隔壁（図３－５）、「船板」（図３－６）、「棒状貫」（図３－８）、船底（図３－９）の破片が遺存する。

法量　「船端部」全体の残存長36.3cm、残存高30.6cm、突帯部分での船体幅18.0cm（推定）。

８　西都原169号墳における船形埴輪の出土地点および出土状況（図４・表２）

西都原169号墳のトレンチおよび調査区は、図４の通りである。また、同古墳出土船形埴輪の各破片の出土トレンチ・出土調査区を表２に示す。

今回、当該船形埴輪の出土位置を示すドット図を提示しないが、表２を見ると、船形埴輪片の出土地点は、①２区周溝Ｂ区、②２区周溝Ｃ区、③９トレンチと10トレンチの間、④10トレンチ、⑤10トレンチと11トレンチの間、という５箇所に限定されていることがわかる。このうち、①と③、②と⑤はそれぞれ同一地点を示すので、当該船形埴輪の出土地点は、墳丘「突出部」の南側周溝内に限定されていることがわかる。出土層位はいずれも周溝覆土の下層で、原位置を留めるものはない。また、周溝内の特定の場所から多数の破片が集中して出土する状況も看取できなかった。

上記のような状況を総合すると、当該船形埴輪は、墳丘南南東に付設された「突出部」の上面ないし「突出部」に近接する周溝の底面に配置されていた可能性が高い。

９　西都原169号墳出土船形埴輪についての補足（図５）

西都原169号墳と同170号墳の船形埴輪はいずれも準構造船を表現するが、前者がいわゆる「二股式」であるのに対して（図５－４）、後者はいわゆる「ゴンドラ形」を呈する（図５－３）。隣接古墳から船形埴輪が出土した事例としては、大阪市高廻り１号墳および同２号墳の出土例が挙げられる（大阪市文化財協会1991）。高廻り１号墳出土の船形埴輪が「ゴンドラ形」であるのに対して、高廻り２号墳出土の船形埴輪は「二股式」である（図５－２）。なお、同一古墳での船形埴輪の複数出土例としては、三重県松阪市宝塚１号墳が挙げられる（図５－５：松阪市教育委員会2005）。

西都原169号墳出土船形埴輪の舷側板に施された線刻文様は、直弧紋の形骸化したものと推測される。奈良県北葛城郡広陵町巣山古墳の外堤北側に近接する「墳丘状高まり１」から出土した船形埴輪（図５－１：以下、「巣山古墳外堤北側例」と呼称）の舷側板に見られる直弧紋は、西都原169号墳の直弧紋よりも先出的な特徴を示す（奈良県立橿原考古学研究所2011）。巣山古墳外堤北側例では「船底部」と舷側板が突帯で区画されているのに対して、西都原169号墳例は沈線で区画されている。また巣山古墳北側例では「竪板」の外周に沿って二重の刻線が見られるのに対して、西都原169号墳例は半円形の刻線１条が施されるのみである。一方、高廻り２号墳出土船形埴輪では、「竪板」前面には外周に沿って突帯が貼付されており、同部位の表現手法については、「突帯」（高廻り２号墳例）→「２条の線刻」（巣山古墳外堤北側例）→「１条の線刻」（西都原169号墳例）という変遷が看取される。西都原169号墳出土船形埴輪は、西都原169号墳（および西都原171号墳）で出土している他の形象埴輪群と同じく、畿内中枢地域における形象埴輪の形態的特徴や製作手法を熟知した埴輪工人が製作した埴輪と見做すことが可能である。

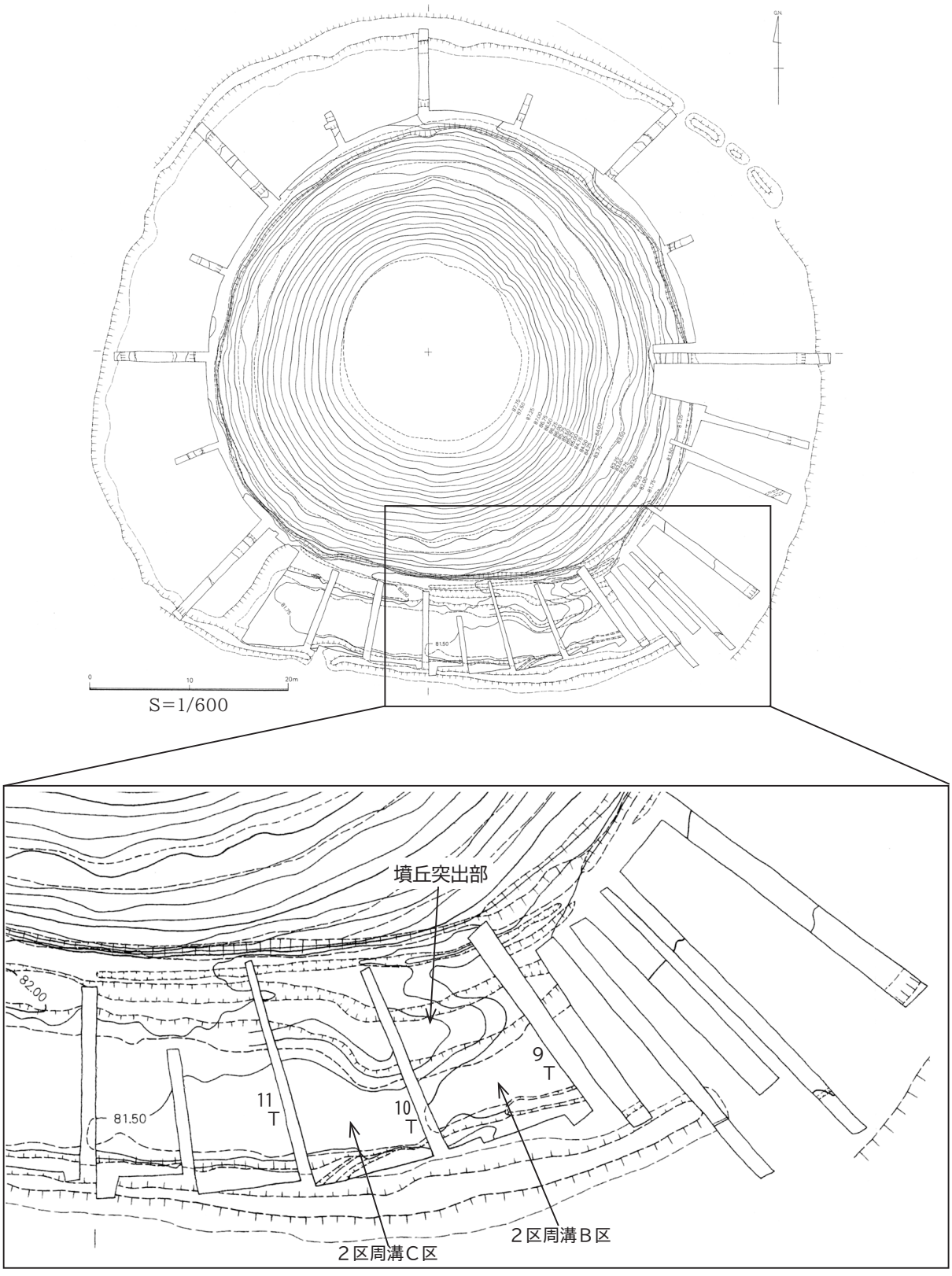


図4　西都原 169 号墳における船形埴輪の出土トレンチ・出土調査区

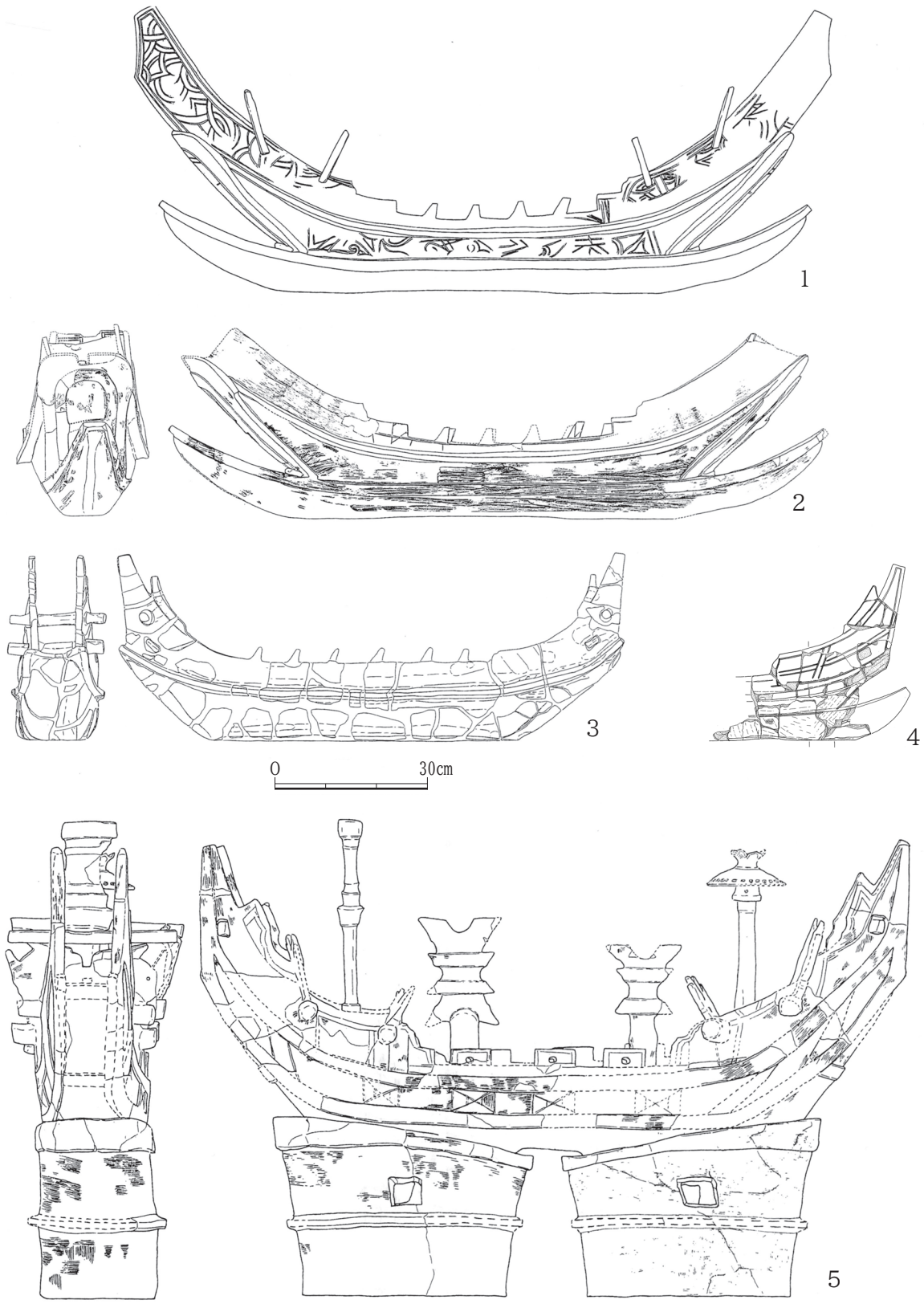


図５　西都原古墳群で出土した「二つ」の船形埴輪と関連資料（S =1/12）
（１：巣山古墳外堤北側、２：高廻り２号墳、３：西都原 170 号墳、４：西都原 169 号墳、５：宝塚１号墳）

10　おわりに

前述のように、1912（大正元）年の段階で、西都原170号墳から船形埴輪が出土していたことは確実であるが、それを船形埴輪として初めて認識したのは、20年後、1932（昭和７）年のことであった。この船形埴輪については、後藤守一自身、若干の「躊躇」を抱いていたにも拘わらず、「西都原169号墳出土」説が長らく流布することになる。その後、「平成調査」において、西都原170号墳から「大正調査」出土船形埴輪の破片が「発見」されるに至り、当該船形埴輪（重要文化財、東京国立博物館所蔵）の帰属がようやく確定する。

その一方で、「平成調査」において、西都原169号墳から「もう一つ」の船形埴輪が出土したことが、西都原古墳群の「船形埴輪」をめぐる事態を更に複雑化させることになった。

これまで、船形埴輪の集成はい幾つか提示されているが、置田雅昭の集成では西都原170号墳出土船形埴輪を「西都原169号墳出土」とし（置田1988）、松阪市の集成でも同様である（松阪市・松阪市教育委員会2003）。今なお「混乱」は続いているのである。

本稿では、西都原古墳群出土の「二つ」の船形埴輪をめぐる学史的経緯を辿るとともに、西都原169号墳で出土した「もう一つ」の船形埴輪について、新たに実測図を作成し、出土地点・出土状況などについての基礎情報を提示した。今後、西都原古墳群出土の「二つ」の船形埴輪についての正確な情報が共有されるとともに、船形埴輪研究の一助となることを期待する次第である。

謝辞

2000（平成12）年、大阪大谷大学文化財学科（現・歴史文化学科）の学生を率いて西都原169号墳の発掘調査に従事するようになってから、文字通り「最初」に出土した形象埴輪片が、この船形埴輪の破片である。この破片については、その後なかなか接合が進展せず、器種の認定も遅れたが、整理作業の最終段階になってようやく複数の破片が接合し、初めて船形埴輪として確定したという経緯がある。大阪大谷大学大学院在学中に同作業に尽力された近藤麻美・金行（竹中）美智子両氏および、最終段階で船形埴輪片の接合および実測作業に協力いただいた清喜裕二氏に感謝申し上げる。そして、コロナ禍の収束以降、西都原考古博物館において、その他の破片類との接合関係を粘り強く確認いただいた竹中（金行）美智子氏に対してあらためて感謝申し上げる。また、種々ご高配いただいている宮崎県立西都原考古博物館の学芸員諸氏にも謝意を表したい。

本稿に掲載した西都原169号墳出土船形埴輪（図１･図２）の実測（既存の実測図の合成および補測･補正）は犬木が行い、トレースは近藤麻美、版組は犬木が行った。種々ご助力いただいた近藤麻美氏に対して心より感謝申し上げる次第である。

註

１）西都原古墳群において、大正期の古墳番号（[旧番号]）と現在の古墳番号（[現番号]）は異なっている。「丸山支群」（「中央群」）における３古墳の新旧古墳番号は、以下の通りである。

［旧番号］西都原110号墳＝［現番号］西都原169号墳

［旧番号］西都原111号墳＝［現番号］西都原170号墳

［旧番号］西都原112号墳＝［現番号］西都原171号墳

本稿では基本的に［現番号］を用い、必要に応じて［旧番号］を併記する。［旧番号］を記す場合は「西都原110号墳［旧］」、

［現番号］を記す場合は「西都原169号墳」と表記する。

２）別稿（犬木2014a）で整理した通り、西都原古墳群大正調査の発掘調査報告書は合計３冊刊行されており（宮崎県1915・1917・1918）、1926（昭和元）年には、これら３冊を補訂・合冊した『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告』（宮崎県1926）が刊行されている。筆者は、前三点をそれぞれ［初刊本Ａ］［初刊本Ｂ］［初刊本Ｃ］、合冊版を［補訂・合冊本］と呼称している。なお、1983（昭和58）年には、西都市教育委員会より復刻版が刊行されており（西都市教育委員会1983）、これを［復刻本］と呼称する。

３）例えば、宮崎県1915に所収されている西都原112号墳（現171号墳）の発掘調査報告は、表題を「第112号塚」とすべきところ「第210号塚」と誤記されている（宮崎県1915、101頁）。また、「調査日報」ないし「調査日誌」に相当する「調査作業」（同前、p.8）の記述にも誤記が多々見られる。

４）『日州新聞』1913（大正２）年１月８日朝刊［3545号］掲載記事を参照されたい（犬木2014b）。

５）田中編1993の史料49を参照されたい。

６）『宮崎県史』では、当該船形埴輪および子持家形埴輪の出土古墳を「西都原169号墳」とする（宮崎県1993）。

７）『西都原発掘75周年展』図録（石川1988）に掲載されている船形埴輪らしきものが写っている写真（77頁下および78頁上）に、「斎藤忠氏提供」というキャプションが付されている。晩年の斎藤 忠に問い合わせたところ詳細をお聞きすることは叶わなかったが、2014年、宮崎県立西都原考古博物館で開催された「西都原古墳群発掘100年」記念特別展に伴う関連資料調査の過程で、東京大学総合研究博物館に、上記２点と同一の写真が「柴田常恵撮影写真」として保管されていることが判明した（宮崎県立西都原考古博物館2014、p.17）。ちなみに上記の写真２点は、宮内庁書陵部および京都大学考古学研究室には保管されておらず（犬木2015a）、國學院大學所蔵の「柴田常恵写真資料」にも含まれていない（國學院大學日本文化研究所2006）。

８）宮崎県教育委員会による西都原171号墳出土埴輪の整理作業は、「大正調査」出土埴輪全点（京都大学総合博物館所蔵）を借用した上で、「平成調査」出土埴輪との接合関係を実物で確認しながら進められたが、諸般の事情により、図化作業着手以前に京大所蔵埴輪を急遽返却することになったため、同発掘調査報告書（宮崎県教育委員会2004）には両者の接合関係は反映されておらず、その経緯も記載されていない。なお、その後、京都大学総合博物館所蔵の西都原171号墳出土埴輪については、山中一郎（故人）および阪口英毅（故人）の御理解・御高配の下、筆者らによる再実測・追加実測作業が完了しているが、その成果は未刊のままになっている。早期刊行に向けて尽力したい。

９）本船形埴輪（図１～図３）には、舷側板上端面の突起（ピボット）など、前後（舳艫）の判断基準がなく、船首（舳）であるのか船尾（艫）であるのか確定できないため、本稿では「船端部」と呼称する。

10）置田雅昭の１類（置田1988）、高橋 工のＡ型式（高橋1991）に相当する。

11）突帯の上側を「舷側板上部」、下側を「舷側板下部」と呼称する。

12）高廻り２号墳出土船形埴輪および西都原170号墳出土船形埴輪においても、「板作り」ではなく「紐作り」による製作技法が確認されている（大阪市文化財協会1991、古谷編2005）。

参考文献

石川悦雄1988『西都原発掘75周年展』宮崎県総合博物館

犬木 努2010「東京国立博物館所蔵西都原古墳群出土埴輪」『西都原169号墳（遺物編）西都原170号墳（遺物編）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第９集、宮崎県教育委員会、pp.46-67

犬木 努2014a「宮内庁書陵部所蔵『西都原古墳発掘実況写真』（一）－西都原古墳群大正調査の基礎資料（２）〔その１〕－」『大阪大谷大学紀要』第48号、大阪大谷大学、pp.1-54

犬木 努2014b「日州新聞にみる大正時代の西都原古墳群とその周辺（一）［資料編］－西都原古墳群大正調査の基礎資料（３）〔その１〕－」『大阪大谷大学文化財研究』第14号、大阪大谷大学文化財学科、pp.21-87

犬木 努2014c「高校・中学の歴史教科書にみる西都原古墳群－子持家形埴輪と船形埴輪－」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第10号、宮崎県立西都原考古博物館、pp.33-49

犬木 努2015a「宮内庁書陵部所蔵『西都原古墳発掘実況写真』（二）－西都原古墳群大正調査の基礎資料（２）〔その２〕－」『大阪大谷大学紀要』第49号、大阪大谷大学、pp.1-88

犬木 努2015b「西都原古墳群の埴輪－「平成調査」から「大正調査」へ－」『西都原古墳群 総括報告書』宮崎県教育委員会、pp.93-114

犬木 努2019「近い陪塚／遠い陪塚／見えない陪塚－女狭穂塚古墳と「陪塚」群の空間構制－」『古墳と国家形成期の諸問題』山川出版社、pp.180-185

犬木 努2021「埴輪はどのように認識され分類されてきたか？－形式、作風、型式から同工品まで－」『美術史と考古学』季刊考古学別冊33、雄山閣、pp.44-52
犬木 努2023「古墳と古墳群のトポス－盟主的首長墓の〈空間構制〉試論－」『論集 空間と境界』大阪大谷大学歴史文化学科調査研究報告書第３冊、大阪大谷大学歴史文化学科、pp.1-88
犬木 努編2008『西都原169号墳（遺構編）西都原170号墳（遺構編)』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第７集、宮崎県教育委員会
犬木 努編2010『西都原169号墳（遺物編）西都原170号墳（遺物編)』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第９集、宮崎県教育委員会
犬木 努・永友良典2020「下北方13号墳出土形象埴輪の再検討－組成・配置・工人編制の分析に向けて－」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第16号、宮崎県立西都原考古博物館、pp.23-36
大阪市文化財協会1991『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ』
置田雅昭1988「船形埴輪」『ニゴレ古墳』弥栄町文化財調査報告第５集、弥栄町教育委員会、pp.97-105
國學院大學日本文化研究所2006『國學院大學学術フロンティア構想 柴田常恵写真資料目録Ⅱ』
後藤守一1934「昭和８年の回顧Ⅰ」『ドルメン』第３巻第１号、岡書院、pp.62-65
後藤守一1935a「西都原発掘の埴輪舟(其一)」『考古学雑誌』第25巻第８号、考古学会、pp.17-38（「上古時代の舟」と改題し、後藤守一1942『日本古代文化研究』(河出書房）所収［pp.222-248])
後藤守一1935b「西都原発掘の埴輪舟(其二)」『考古学雑誌』第25巻第９号、考古学会、pp.11-22（同上）
斎藤 忠1963『日本の発掘』東大新書45、東京大学出版会
斎藤 忠1982『日本の発掘 増補版』ＵＰ選書222、東京大学出版会
西都市教育委員会1983『宮崎県西都原古墳調査報告書』第一書房
末永雅雄1934『日本上代の甲冑』岡書院
高橋克壽1993「西都原171号墳出土の埴輪」『宮崎県史研究』第７号、宮崎県、pp.35-59
高橋 工1991「船形埴輪の検討」『長原遺跡発掘調査報告Ⅳ』大阪市文化財協会、pp.176-182
田中 茂編1993「西都原古墳群発掘関係史料」『宮崎県史 資料編 考古２』宮崎県、pp.913-974
永友良典編1990『下北方古墳－遺物編－』埋蔵文化財調査研究報告Ⅲ、宮崎県総合博物館
奈良県立橿原考古学研究所2011『巣山古墳・寺戸遺跡』奈良県文化財調査報告書第142集
濱田耕作1930「埴輪の思ひ出」『考古学』第１巻第４号、東京考古学会、pp.268-272（濱田耕作1947『青陵随筆』(座右寶刊行会）所収［pp.24-31])
古谷 毅編2005『重要文化財 西都原古墳群出土 埴輪 子持家・船』東京国立博物館
松阪市・松阪市教育委員会2003『松阪市制施行70周年記念特別展 全国の船形埴輪』
松阪市教育委員会2005『史跡 宝塚古墳 保存整備事業に伴う宝塚１号墳・宝塚２号墳調査報告』松阪市埋蔵文化財報告書１
宮崎県1915『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告』
宮崎県1917『宮崎県西都原古墳調査報告書』
宮崎県1918『宮崎県史蹟調査報告 第三冊』
宮崎県1926『西都原史蹟調査報告書』
宮崎県1993『宮崎県史 資料編 考古２』
宮崎県教育委員会2003『西都原171号墳（第１分冊)』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第４集
宮崎県教育委員会2004『西都原171号墳（第２分冊)』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第５集
宮崎県教育委員会2015『西都原古墳群 総括報告書』
宮崎県教育委員会2019『西都原古墳群陵墓参考地周辺調査報告書』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第13集
宮崎県立西都原考古博物館2014『展示会Ⅱ 埴輪を科学する』

挿図出典　図１・図２　犬木作成、図３　犬木編2010より一部改変、図４　犬木編2008より一部改変、図５－１：奈良県立橿原考古学研究所2011、２：大阪市文化財協会1991、３：古谷編2005、４：犬木作成、５：松阪市教育委員会2005
表１　犬木2015a、表２　犬木作成

酒元ノ上横穴墓群内の円墳出土遺物（概要）

今塩屋　毅行・日髙　広人・後藤　清隆

1　はじめに

特別史跡西都原古墳群内に所在する酒元ノ上横穴墓群は、1994（平成６）年度の発見を契機に、現地保存の協議ならびに内容確認目的の発掘調査を経て、1997（平成９）年に特別史跡の追加指定による現地保存がなされた。このうち主要部分については、火山灰土層に穿たれた横穴墓を当時のままに露出させて展示することとし、景観に配慮した植生屋根と木造の張弦梁による遺構覆屋建物が平成11（1999）年に竣工した。竣工後は、全国でも有数の遺構展示施設として長らく公開活用されてきた。

しかしながら、経年劣化による屋根材の腐朽や梁材の蟻害が顕著となったため、西都原考古博物館では展示施設の再整備に向けた工事等の計画準備を進めており、これまでの調査成果の整理と統合に基づく展示解説コーナーその他の拡充策もあわせて検討しているところである。

本稿は、その一環として酒元ノ上横穴墓群内にある円墳の周溝内から出土した遺物の概要を示すものである。

2　これまでの経過

本稿で紹介する円墳は、西都原古墳群第１支群内にある酒元ノ上横穴墓群内に位置する。この円墳を含む横穴墓群は、県営農村基盤総合整備パイロット事業尾鈴地区西都原工区の16号支線（農道）建設に伴う平成６（1994）年度の発掘調査で初めて発見され（西都市教育委員会1996）、特別史跡の追加指定を受けた（平成９年３月６日付け）。続いて「特別史跡西都原古墳群保存整備事業」のもとで保存整備が図られ、平成11（1999）年に「西都原古墳群遺構覆屋保存施設」として竣工した。

これまでの発掘調査(平成６～９・13年度)等では、円墳１基と馬埋葬土坑等に加えて横穴墓の墓道10基（1～10号墓道）が検出された(図１参照)。横穴墓の玄室は推定も含めて15箇所あり、そのうち５箇所が発掘調査、２箇所の内部状況が確認された[1)]。これらの調査結果や学術的な評価等は、発掘調査報告書(西都市教育委員会1996・置田雅昭2006)や東憲章・北郷泰道・置田雅昭・柳澤一男各氏らの著述に詳しい（東1996・2001・2015a・2015b、北郷2005、置田2006、柳澤2015など)。

円墳[2)]については、平成６年度の発掘調査においてその一部が検出され、平成８・９年度には周溝(周堀)全体を対象とした発掘調査が実施された(写真１)。特別史跡の追加指定後は、墳丘の盛土復元、周溝等の平面表示といった史跡整備（宮崎県教育委員会2006）が行われた(写真２)。

なお、酒元ノ上横穴墓群は円墳と西都原200号墳の間に位置する関係にあり、西都原200号墳の南側には201号墳が所在する。この201号墳は平成24･25年度には史跡保存を目的とした発掘調査が行われ、地中レーダー探査も実施された（宮崎県教育委員会2019)。201号墳は、墳丘径約24mで６世紀後葉から７世紀初頭の築造時期と考えられ、周溝内では地下式横穴墓も１基検出された。200号墳は、地中レーダー探査では周溝状の反応はみられないほど大きく削られているという(宮崎県教育委員会2019)。築造時期は不明だが、概ね６～７世紀代とみて大過ない。

３　円墳の概要

円墳は、酒元ノ上横穴墓群６号墓と７号墓の間に位置し、墳丘径は約12ｍを測る。墳丘盛土および埋葬施設は既に失われた「円墳」[3]で、６号墓側では隅丸方形状の突出部を成す大小２重の周溝を巡らす。墳丘相当部分の周辺では、長方形の土坑(近現代の貯蔵穴か)が数基検出されたのみである(図１)。

２重に巡る周溝のうち、墳丘側の周溝を内周溝（第１周溝）とする。検出時の幅約２ｍ、深さ0.8～１ｍ、底面幅は0.6～1.2ｍで、内径（周溝内縁径）は10.5ｍ、外径（周溝外縁径）は14～14.6ｍで突出部を含めると15.3ｍとなる。断面形は逆台形で周溝底部付近はさらに箱型に掘りこまれる。

周溝内埋土は大きく上・中・下層の３層(Ⅰ～Ⅲ層)に区分される(第２図a-b・c-d・c-e土層)。周溝内埋土上層(Ⅰ層)は、霧島御鉢降下スコリア(Kr-Th：1235年頃)を密に含むレンズ状堆積土層で、この降灰によってほぼ埋没する。周溝南東側ではⅠ層の上面より道路状遺構が掘削されたことが読み取れる(c-e土層)。中層(Ⅱ層)はクロボク由来の黒色土･黒褐色土を中心とする堆積層で、下層(Ⅲ層)は黄褐色粘質土層・霧島小林軽石（Kr-Kb）を含む褐色土層・黒ニガ層およびKr-Kh由来のブロック土塊を多く含む堆積土層である。墳丘盛土の崩落土の再堆積層と考えられる。

外周溝(第２周溝)は、検出時の幅0.5～１ｍ、深さ0.3ｍ、底面幅は0.5～0.6ｍで、内径（周溝内縁径）は16.6ｍで突出部を含めると18ｍ、外径（周溝外縁径）は18ｍで突出部を含めると19.6ｍとなる。周溝は断面箱形の布堀状に掘削される。この周溝底面付近は内周溝のⅢ層に類似した土層堆積なので、外周溝の内縁または外縁側の空間に周堤が存在した可能性も想定される。外周溝の南東側突出部の中央部分には、円形土坑(直径１ｍ、深さ0.5ｍ)が外周溝の埋没後に掘削されており、馬歯の出土から馬埋葬土坑と考えられている(西都市教育委員会1996)。この外周溝と８・９号墓の墓道端部とは切り合い関係にあり、８・９号墓の墓道掘削は外周溝の埋没後となる。

また、円墳付近では道路状遺構も検出された。横穴墓群の位置する谷部斜面と台地平坦面を結ぶように、６号墓側から円墳の周溝内を横断(周溝埋土を掘削)して調査区外に延びている。検出部分の規模は、長さ20ｍ、最大幅0.7ｍ、深さ0.1ｍの溝状を呈し、断面箱型の底面には硬化面が形成する。

ここで、円墳の墳丘基底面や周溝を覆う堆積層に着目して、墳丘盛土が失われた時期を簡単に検討しておく。まず、周溝の検出面は表土層から約0.75～1ｍ下面にある鬼界アカホヤ火山灰層（Kr-Kh）【④層】である(第２図a-b・c-d・c-e土層)。円墳の北西～南東側は谷部に向けた緩斜面となるため、黒色土層(クロボク層)【③層】が残存していた(第２図c-e土層)。③層ないし④層の上面には、霧島御鉢降下スコリア（Kr-Th）を含む黒色土層【②層】が堆積し、周溝内埋土最上層(Ⅰ層)も覆う。この②層は墳丘基底面上にも堆積するので、墳丘削平に伴う整地層と考えられる。②層より上位は、桜島文明軽石(Sz-3)や近世陶磁器等を含む造成土が互層状に堆積する【①層】。

したがって、墳丘の削平された時期は、図２c-e土層にて断面観察されるKr-Thと道路状遺構との切り合い関係と①層中の桜島文明軽石(Sz-3)の存在から、Kr-Thの降灰(1235年頃)以降に掘削された道路状遺構の埋没時からSz-3の降灰(1471～1476年頃)より前の間と推測されるので、概ね13～14世紀頃と想定される。墳丘が削平される背景の一つには、西都原201号墳の古環境推定結果[4]を踏まえると、中世期における西都原古墳群内の耕地化と関係するもの推測される。その後、近世期に至っても円墳の立地する開析谷の東側緩斜面地を平坦な畑地にする客土造成が進んだようである。

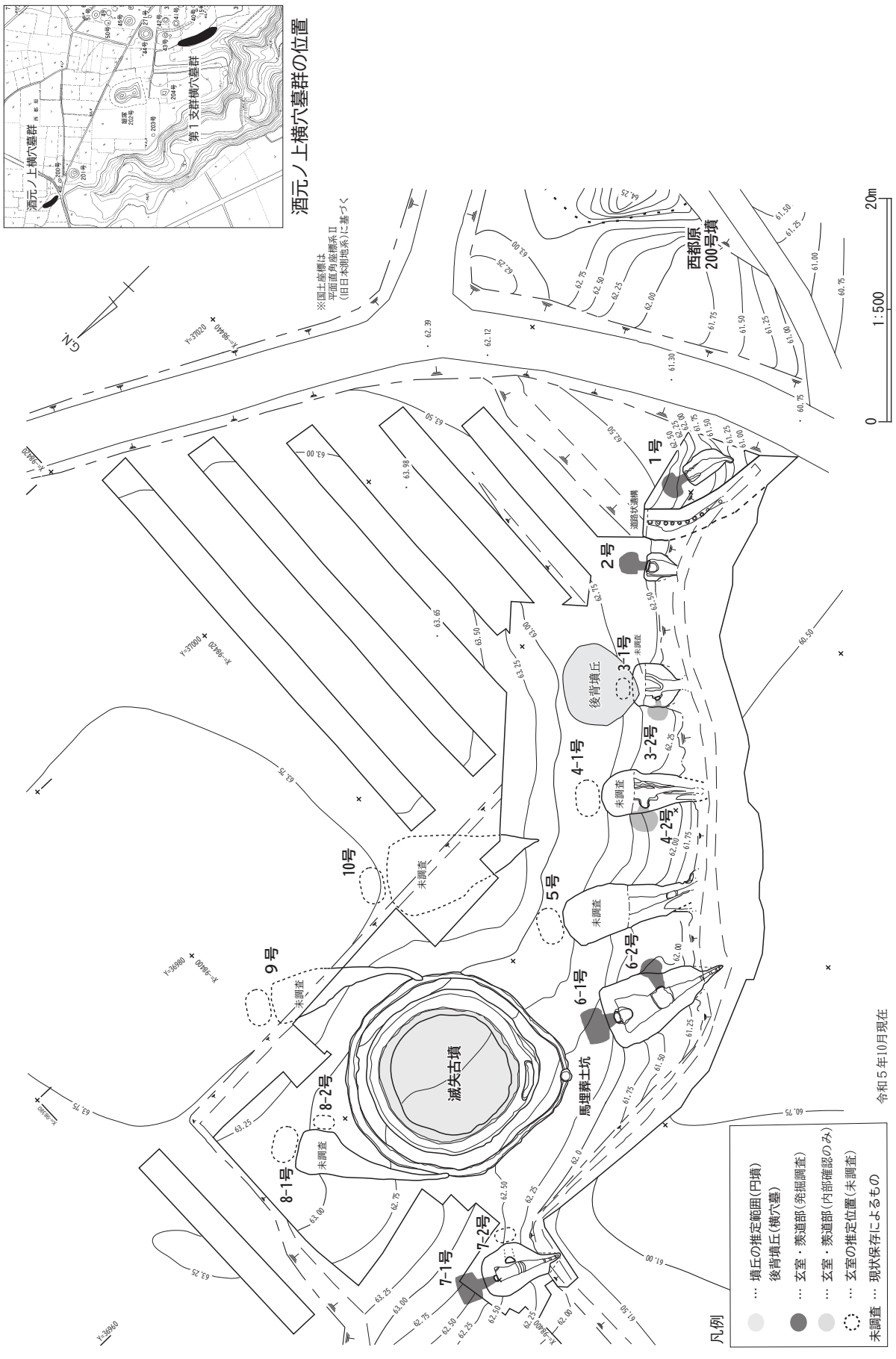


図1　酒元ノ上横穴墓群遺構分布図

４　出土遺物の概要

円墳に関わる出土遺物は、すべて周溝埋土からの出土で、平成６年度の西都市教育委員会調査(古墳の南西部分)と平成８・９年度の宮崎県教育委員会(県文化財課)調査の内周溝(第１周溝)のみであり、土師器坏・高坏、須恵器坏蓋・坏身・高坏・壺・提瓶・甕などがある。このうち図化掲載に堪えうるものは、19点(図３－１～19)である。９・11、14の一部は西都市教委調査、それ以外は県教委調査時の出土遺物である。遺物は層ごとの一括と三次元記録(点上げ)にて取り上げられている。遺物のいずれも周溝内の中・下層(Ⅱ・Ⅲ層)出土であり、Kr-Thの降灰前までに周溝内に入り込んだものである。

(１)　古墳時代の土師器・須恵器(図３－１～13)

土師器坏(１)はⅢ層出土で口径14.6cm、器高6.3cm。口縁部外面は緩く凹ませる。底部は丸底気味である。内外面は横方向主体の手持ちヘラミガキが丁寧に施される。胎土は精良で、器面の発色は橙色を呈する。土師器高坏(２)はやや歪な坏部資料でⅢ層出土。口径12.7cmで、口縁部は直立ないし外方にそのまま開く。器面の摩滅が顕著であり、胎土は精良で、器面の発色は橙色を呈する。

須恵器には坏蓋(３･４)、坏身(５～８)、高坏(９･10)、𤭯(11)、壺(12)、提瓶(13)と甕(14)がある。坏蓋は２点ともⅡ層出土。３は口径8.2cm・受け部径10.2cmで、回転ヘラケズリ調整の天井部には摘みの接合痕が残る。４は口径12cm・受け部径13.8cmで、かえり部の端部は受け部側に開く。

坏身のうち、５はⅡ層、６～８はⅢ層出土。法量的には口径9.3cm/器高3.7cmの５、口径10.1cm/器高3.4cmの６・７、口径10.6cm/器高3.7cmの８に細分される。いずれの底部外面には回転ヘラ切り痕がそのまま残されている。いわゆる「ヘラ切り未調整」と呼称されるものである。

高坏(９・10)のうち、９は無蓋の長脚高坏[5)]である。口径10.8cm、底径11.2cmで四方の方形透かしが入る。10はⅡ層出土で底径は10.8cm、四方の方形透かしが入る。脚裾部の端部は短く折り返すタイプなので、９のような長脚高坏とみられる。

𤭯(11)は､頸部より下の部位は西都市調査分[6)]､口縁部は県文化財課調査分(Ⅱ層)の出土。口径11cm･器高12.6cmで胴部は扁平化し、底部は平底となる。胴部中央に円孔１つがある(直径1.5cm)。

壺(12)はⅢ層出土。長頸壺の一種とみられるが口縁部～頸部を失う胴部資料で各部位の合成復元により図化した。胴部最大径13.2cm、底径８cmで胴部最大径付近まで回転ヘラケズリ調整が及ぶ。

提瓶(13)はⅢ層出土。口縁部と胴部片から復元推定した。体部の大きさに比して口径が小さい。口径5.2cm・器高23.3cm・体部の最大径は21.6cmで、体部外面には同心円状のカキ目に灰被り、その背面側は回転ヘラケズリ調整が残る。カキ目調整のある側面側には円盤状の閉塞痕跡がある。

甕(14)はⅢ層出土。口径は19.6cmで口縁端部の外面側は凹凸が形成され、その端部は上方に丸く跳ね上がる。肩部付近の外面は擬格子タタキ目、内面は同心円当て具痕が残る。内外面の色調は灰～青灰色を呈するが、その焼成はやや不良気味である。なお、掲載図と同一個体の胴部片[7)]も多く出土しているが、あまりの破片化であったため、今回は口縁部～頸部付近の接合復元と図化にとどめた。細片化の著しいこと、その破断面の形状などから徹底した人為による破砕を受けたと考えられる。

なお、胎土と器面の発色を整理すると、３と12は胎土の発色は赤褐色、器面の発色は青みの強い灰色である。４～11・13・14は白色砂粒を含む胎土で、器面は薄い灰色を呈する。

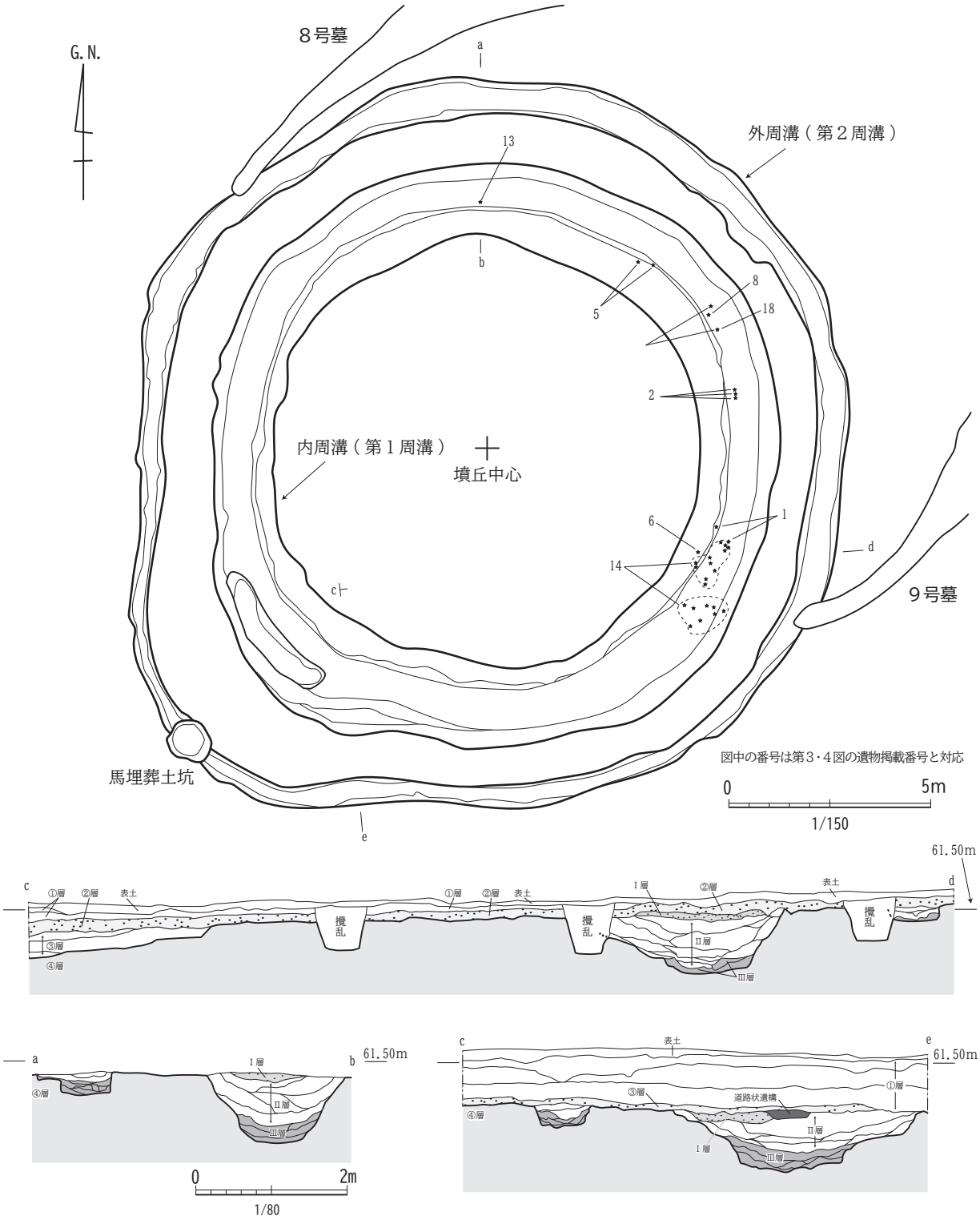


図２　円墳（滅失古墳）実測図

（２）平安時代の土師器・須恵器(図４-15 ～ 19)

土師器坏(15 ～ 18)はⅡ層出土。15の底径5.7cm、16の底径6.4cm、17の底径6.6cmで、18は口径13.1cm・器高4.8cm・底径6.4cmである。３点とも底部外面に回転ヘラ切り痕跡が残る。胎土は細かい砂粒を含み、器面は橙色ないしにぶい黄橙色である。須恵器の長頸壺(19)はⅡ層出土。擬二重口縁を有するタイプで、頸部付近と胴部下半の資料である。精良な胎土でその器面は灰白色を呈する。

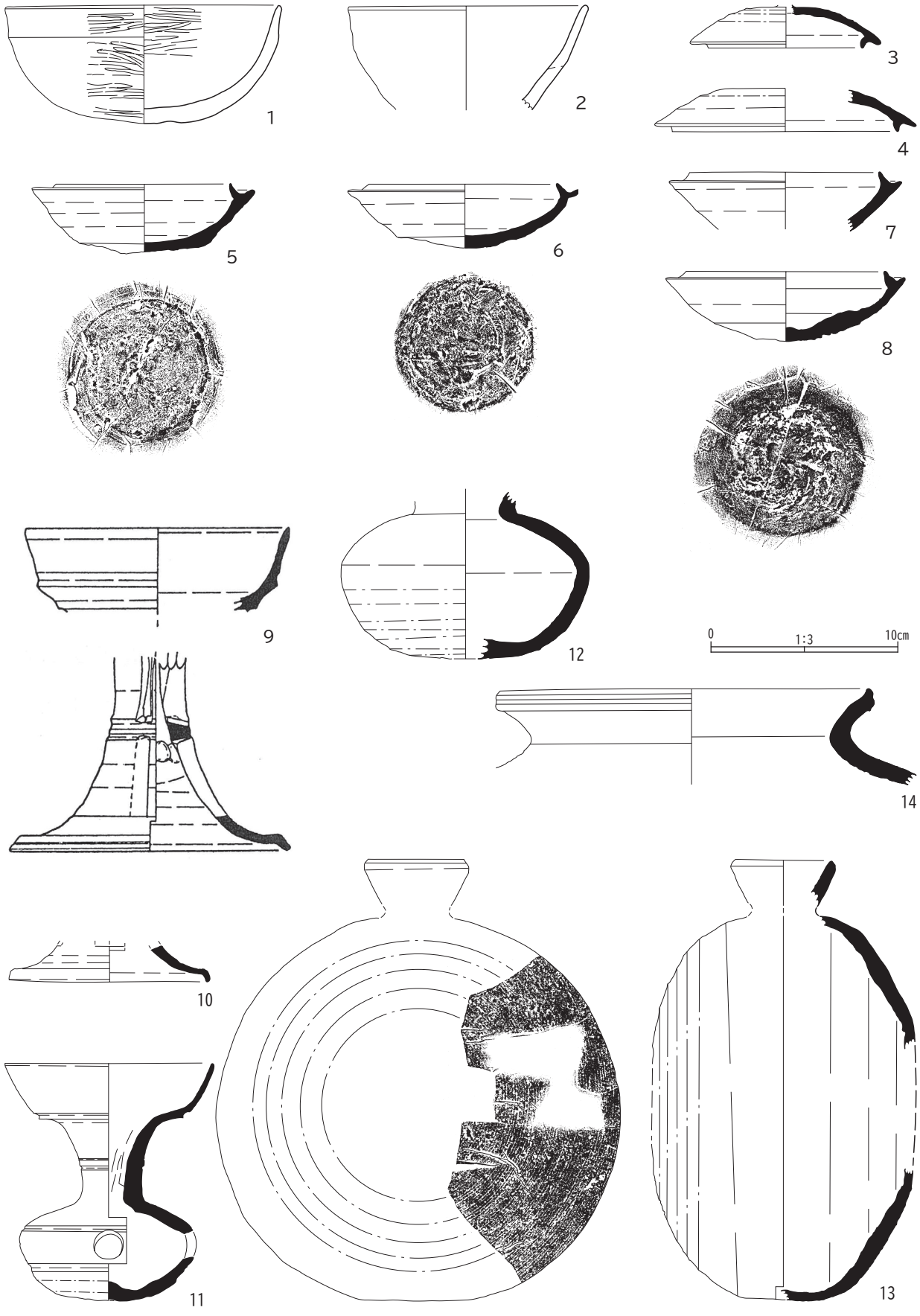


図３　出土遺物実測図（１）

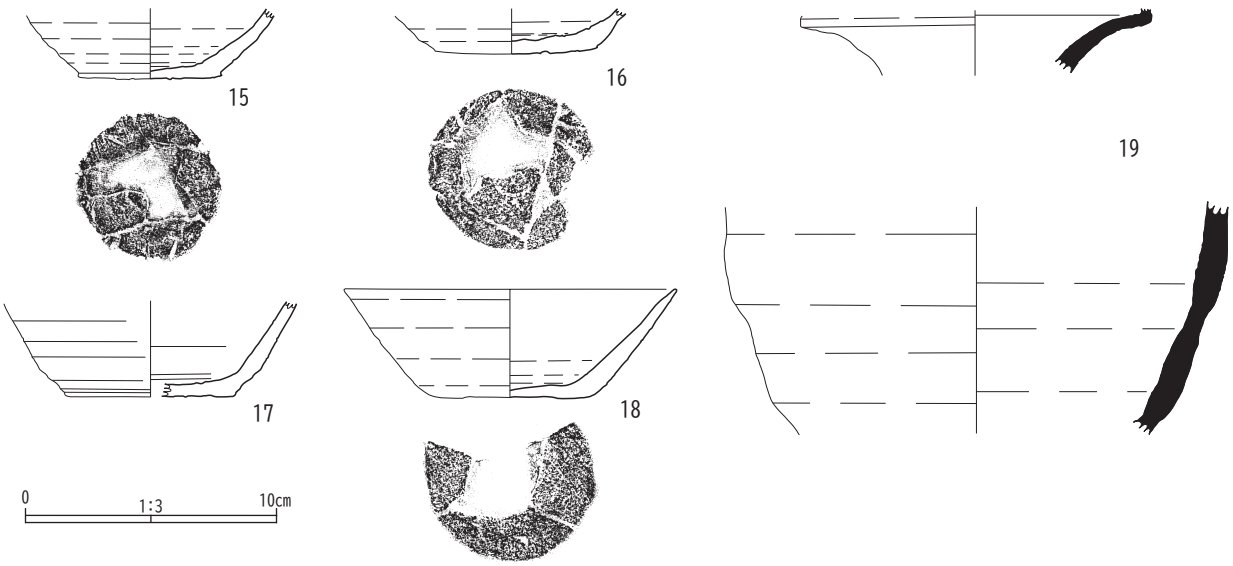


図４　出土遺物実測図（２）

５　まとめ

（１）編年的位置づけ

円墳の内周溝から出土した土器群の編年的位置づけについて若干の検討を試みたい。古墳の築造時期に近い土器は１～14(図３)である。まず、土師器坏(１)は、高鍋町下耳切第３遺跡における土師器編年Ⅱ期(今塩屋2006)にあたるもので、須恵器編年のTK217型式新段階(田辺1981)および隼上りⅢ型式(増田1995)ならびにⅡ-２期(今塩屋2023)に並行関係づけられるものと考えられる。

次に須恵器に着目すると、坏蓋(３)は、坏G1類(長・久住2023)に相当し、かえり部が受け部より突出する形態から、TK217型式古段階(隼上りⅡ型式･Ⅱ-１期)に位置付けておきたい[8)]。坏蓋(４)は、坏蓋B1類(長・久住2023)とするよりは、西都原205号墳出土遺物(宮崎県教育委員会2000)にみる同類品を重視して、金属器模倣埦(大型品)の蓋としておく。須恵器坏身(５～８)は、その法量上の分類から、５はH3類、６・７はH3´類、８はH2類(今塩屋2023)にあたるから、須恵器編年上からは５～７はTK217型式新段階(隼上りⅢ型式･Ⅱ-２期)に並行づけられる。８はTK217型式古段階(隼上りⅡ型式･Ⅱ-１期）に相当する。壺(11)は器高の縮小化と底部の平底化が進む形態なので、高鍋町下耳切第３遺跡における須恵器編年のＣ期(今塩屋2006)にあたり、TK217型式新段階（隼上りⅢ型式・Ⅱ-２期）に並行づけられる。

このように上記にて取り上げた須恵器の編年的位置づけは、TK217型式古・新段階（隼上りⅡ・Ⅲ型式、Ⅱ-１・２期）に並行し、実年代的には７世紀代第２四半期～第３四半期(今塩屋2023)となる。それ以外の須恵器の器種（９・10・12～14）も同様な位置づけとなろう。

続いて、古墳築造後の土器群(15～19)について検討する。まず、回転台成形の土師器坏(15～18)は、器形や法量の観点から、堀田孝博氏による宮崎平野部の平安時代土師器供膳具の編年に照らし合わせると、第Ⅲ期に位置づけられる（堀田2012)。実年代的には９世紀末～10世紀前葉と推定される。

須恵器長頸壺(19)の擬二重口縁は、九州中南部地域の古代須恵器に特徴的な器形であり、胎土･焼成･つくり等から下村窯跡産の可能性が高い。口縁部形態から第１口縁と第２口縁の区別が明瞭な長頸壺１類に位置づけられるから、下村窯跡編年の３期(９世紀前葉)の資料と考えられる（竹中2008)。

（２)出土土器からみた円墳の築造時期

古墳築造時期に伴う土器群(図３-1 ～ 14)は、前項にて検討した須恵器編年上ではTK217型式古・新段階（隼上りⅡ・Ⅲ型式、Ⅱ- １・２期）に位置付けられるから、古墳の築造時期の上限はTK217型式古段階（隼上りⅡ型式、Ⅱ- １期）の７世紀前葉（７世紀第２四半期)、下限はTK217型式新段階（隼上りⅢ型式、Ⅱ- ２期）の７世紀中葉頃（７世紀第３四半期）頃と考えられる。

酒元ノ上横穴墓群の出土須恵器について検討した東憲章氏は、隼上りⅡ～Ⅲ型式のものが多いとし、７世紀前葉に築造され、中葉には追葬を終えたとする(東2001)。円墳の出土須恵器も隼上りⅡ・Ⅲ型式にあたるから、須恵器編年上は円墳と横穴墓群の造営期間(築造等)は共時的となる。

こうしてみると、酒元ノ上横穴墓群とは、円墳（高塚古墳）と一体的な古墳時代終末期（飛鳥時代）の群集墳(墓)であり、７世紀前葉～中葉という比較的短い期間に集中的な造墓活動が行われたといえる。この同一群集墳(墓)における円墳と横穴墓という墓制の違いから鑑みると、高塚古墳－群集墓という階層構造の存在も想定されよう。他方、円墳の外周溝から墓道を掘りこむ８・９号墓のあり方は、堂ヶ嶋第２遺跡（西都原古墳群堂ヶ嶋支群）や国分第２遺跡（鷺田支群）における高塚古墳の周溝から竪坑を掘り下げる地下式横穴墓とも共通する築造原理といえる。こうした複雑な埋葬施設のあり方は宮崎平野部でも北部児湯地方の地域的特徴（柳澤2015）にあたると考えられる。

なお、土師器坏や須恵器壺(図４-15 ～ 19)は、周溝内を最終的に覆うKr-Thの降灰より前に、何らかの理由にて周溝内に入り込んだ混入資料といえる。古墳造営の終了後、７世紀後葉～８世紀の空白期を経て９世紀～ 10世紀前半頃の土師器や須恵器が古墳周溝内に出土する事例は、西都原202号墳(宮崎県教育委員会2013)等で確認されている。西都原古墳群内では西都原地区遺跡(西都市教育委員委員会1996）や丸山遺跡(和田2015)といった古代集落や土坑墓等の調査事例があることから、円墳出土の９～ 10世紀代の土器群も円墳付近にも展開したであろう当該期の集落ないし生業活動等と関連する遺物である可能性が考えられるが、祖霊祭祀・追善供養等の可能性を想定する考え方(藤木2013)もありえる。その意味でも、10世紀前半段階までの周辺環境および古墳群としての通史的変遷を把握する上でも重要である。

今後とも、これまでの発掘結果の整理検討を進めつつ、展示活動等を通じた成果の還元を進めていく所存である。

本稿は、日高･今塩屋･後藤による分担作成と協議のうえ、今塩屋が執筆のとりまとめと編集を行った。出土品の整理および実測図作成においては、横山幸子氏のご助力を得た。さらに、出土遺物の所見等については、柳澤一男氏･三吉秀充氏･津曲大祐氏らのご教示を得た。ここに感謝申し上げたい。掲載遺物および掲載写真は、宮崎県立西都原考古博物館にて収蔵・保管している。

写真１
酒元ノ上横穴墓群の発掘調査状況
（西都原考古博物館所蔵）

写真２
酒元ノ上横穴墓群の史跡整備
（西都原考古博物館所蔵）

【註】

1)横穴墓玄室のうち、１号・２号・6-1号・6-2号・7-1号は発掘調査を受け、3-2号と4-2号は内部状況の確認のうえで、そのまま現状保存された。２号・4-2号・6-1・6-2号は西都原考古博物館によって3D計測された。１号・２号と6-1号は西都市教委(西都市教育委員会1996)、7-1号は天理大学(置田2006)による調査報告がある。なお、県教委実施による6-2号の発掘調査報告は改めて別稿に期したい。

2)現時点で古墳番号は付されていない(宮崎県教育委員会2015)。将来的には史跡管理の観点から番号付与が必要となる。なお、酒元ノ上横穴墓群・円墳の遺構配置図(図１)および円墳の実測図(図２)は、現段階での整理経過を示したものである。

3)墳丘部分を何らかの理由によって滅失し、周溝（周堀）のみとなった古墳の意。消失古墳や消失円墳と呼称する識者もある。

4)西都原201号墳周溝内埋土の自然科学分析(宮崎県教育委員会2019)では、Kr-Thの降灰(1235年頃)前後にはイネやソバの栽培やマツの植林が進むことが推定されている。

5)西都市調査報告では、部位ごとに掲載番号を408・409と振られている(西都市教育委員会1996)。

6)西都市調査報告の掲載番号は410である(西都市教育委員会1996)。

7)西都市調査報告の掲載番号411(西都市教育委員会1996)は本書の14と同一個体といえる。

8) 宮崎県域においては坏Ｇ１類の出土例は数少ない。西都原古墳群周辺においては高鍋町下耳切第３遺跡ＳＮ１第１主体部(宮崎県埋蔵文化財センター 2006)や酒元ノ上横穴墓群第1-1・2-1号墓(西都市教育委員会1996)や堂ヶ嶋地下式横穴墓群第17号墓(西都市教育委員会2003)等における坏Ｈとの共伴例からすると、上限はTK209型式新段階（隼上りⅠ・Ⅰ期後半)、下限はTK217型式新段階（隼上りⅢ・Ⅱ- ２期）となろう。

酒元ノ上横穴墓群内の円墳出土遺物（概要）

【引用・参考文献】

今塩屋毅行2006(第２節　古墳時代集落の検討)「第Ⅶ章　まとめ(古墳時代)」『下耳切第３遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第125集、宮崎県埋蔵文化財センター
今塩屋毅行2023「日向における古墳時代終末期の集落と古墳」『集落と古墳の動態Ⅴ－飛鳥時代－』、九州前方後円墳研究会
置田雅昭ほか2006「地下(竪坑)式横穴墓と墳丘の相関関係」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第２号、宮崎県立西都原考古博物館
西都市教育委員会1996『西都原地区遺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
西都市教育委員会2003『堂ヶ嶋第２遺跡』西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第33集
竹中克繁2008「第Ⅳ章　考察　下村窯跡の須恵器編年」『下村窯跡群報告書Ⅱ』宮崎市文化財調査報告書第72集
田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
長直信・久住猛雄2023「九州島における飛鳥時代の土器―土器検討部会のまとめと遺跡動態分析にあたっての留意点―」『集落と古墳の動態Ⅴ－飛鳥時代－』、九州前方後円墳研究会
東憲章1996(4.16号支線道路の横穴群について)『第Ⅵ章.まとめ』「西都原地区遺跡」西都市埋蔵文化財発掘調査報告書第22集、西都市教育委員会
東憲章2001「酒元ノ上横穴墓群」『九州の横穴墓と地下式横穴墓』第Ⅱ分冊第４回九州前方後円墳研究会資料集、九州前方後円墳研究会
東憲章2015a(酒元ノ上横穴墓群)「第２章　西都原古墳群の概要」『西都原古墳群　総括報告書』平成24 ～ 26年度西都原古墳群基礎調査報告、宮崎県教育委員会
東憲章2015b(7　酒元ノ上横穴墓群)「考古　古墳時代　18西都原古墳群」『西都市史』資料編、西都市
藤木聡2013(第１節　西都原202号墳周辺の通史的変遷)「第Ⅳ章　総括」『西都原202号墳』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第10集、宮崎県教育委員会
堀田孝博2012「宮崎平野部における平安時代の土器について―土師器供膳具を中心に―」『宮崎考古』第23号日髙正晴先生追悼記念号（上巻)、宮崎考古学会
北郷泰道2005『日本の遺跡１　西都原古墳群 南九州屈指の大古墳群』、株式会社同成社
北郷泰道2006「再論・南境の民の墓制」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第２号、宮崎県立西都原考古博物館
増田一裕1995「飛鳥時代須恵器の編年にかかる追試作業」『土曜考古』第19号、土曜考古学会
宮崎県教育委員会1997『特別史跡西都原古墳群　発掘調査・保存整備概要報告書』(Ⅱ)
宮崎県教育委員会2000『鬼の窟古墳・西都原205号墳』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第１集
宮崎県教育委員会2006『特別史跡西都原古墳群　西都原古墳群保存整備事業報告書』
宮崎県教育委員以下2013『西都原202号墳』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第10集
宮崎県教育委員会2019『西都原201号墳･第１支群の小円墳群･西都原16号墳』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第12集
柳澤一男2015(4　終末期の墳墓)「第２章 原始古代　第４節 古墳時代の西都」『西都市史』通史編上巻、西都市
和田理啓2015(7　丸山遺跡)「考古　古代」『西都市史』資料編、西都市

西都原考古博物館所蔵古人骨の分析：受傷痕跡所見および幾何学的形態測定学による３Ｄデータの解析

中川朋美[1・3]・田村光平[2]・金田明大[3]・野下浩司[3・4]・中尾央[5]

[1] 名古屋大学人文学研究科、[2] 東北大学東北アジア研究センター、[3] 奈良文化財研究所、[4]九州大学理学研究院、[5]南山大学人文学部

【要旨】

西都原考古博物館および鹿児島県埋蔵文化財センター所蔵の古墳時代古人骨を対象に、(1a) 特に頭蓋について3次元計測を行い、得られた3次元データについて幾何学的形態測定学 (geometric morphometrics) による解析を行った。また (2a) 島内地下式横穴墓から出土した人骨に残された傷についても人類学的検討を行った。結果として、(1b) えびの市、都城市、西都市の資料がある程度まとまっており、従来から言われていた南九州内部での地域差がある程度確認できた。また、(2b) 傷については、戦争のような争いによってついたものとは考えづらい。

１ 導入

形質人類学では伝統的に、古人骨の様々な計測値を元にして、対象となる人骨の形態が他遺跡・地域・時代の人骨の形態変異と比較して、類似と差異を考察している。これは計測値から、発掘された人間の遺伝的距離に関数示唆を得ようとしていることに他ならない。もちろん、発達や環境という要因のせいで、人骨の特徴すべてに遺伝的な要因がそのまま反映されているわけではないが、ある程度遺伝的情報が反映され、上記のような考察が可能であるという点については一定以上の合意が得られており、現在でも研究が続けられている (e.g., Howells 1973; Pietrusewsky 2014; Winburn & Stock 2022)。これは日本でも同様であり、様々な時代の古人骨に関して、頭蓋や四肢骨の計測値から各地の集団について考察が行われてきた。本稿で対象となる古墳時代人骨に限れば、Doi & Tanaka (1987)、池田 (1993)、城 (1938)、川久保・澤田・百々 (2009)、森沢 (1974)、寺門 (1981) などが挙げられるだろう。

また他方で、考古遺物についてはさまざまな形で三次元計測の手法が導入されつつある。石器や土器、埴輪のような (もちろんどれもサイズは物によるが) 比較的小型の考古遺物から、LiDARやドローンを用いた遺構や古墳の計測まで、実にさまざまな計測事例がある (e.g., 中園2017; Kaneda et al. 2022; 城倉2017)。古人骨についても、CTを利用した三次元データの取得がこれまで中心であったが、フォトグラメトリといった低コストの方法も近年徐々に導入されつつあり、研究にも使用され始めている (e.g., Kuzminsky et al. 2018; 中川・吉田・中尾2022; 吉田・中川・中尾2023)。

本稿では宮崎県と鹿児島県で出土した古墳時代古人骨について、三次元データを用いた分析を行なう。具体的には西都原考古博物館所蔵の古人骨および鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の古人骨を対象とし、幾何学的形態測定学による定量化と島内地下式横穴墓出土人骨に見られる傷に関する観察を行う。

２ 資料と方法（1）

本稿で対象とするのは、西都原考古学博物館および鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の古人骨である。詳細は表1を参照されたい。これらの古人骨は主に地下式横穴墓から出土したもので、古墳時代中期～後期に属するものと考えられる。

これらの古人骨に関して、まずは頭蓋の3次元計測を行った（下顎も計測を行なったが、本研究では含めていない）。計測手法は表1にあるような4種類である。これらの手法間で取得された三次元モデル（以下モデル）に大きな形態的な相違がないことはすでに確認されている（Nakao et al. 2022; 中川他2022；野下他2022a）。また取得されたモデルは解析のためにMeshlab（https://www.meshlab.net/）でサイズを落としたが、この過程でモデルに差異が生じないことも確認している（野下他2022b）。

次に、得られたモデルに関して、幾何学的形態測定学（geometric morphometrics、特にランドマーク法）の手法と主成分分析によって解析を行った。幾何学的形態測定学による古人骨モデル解析はこれまでもさまざまな地域・時代の資料で行われてきているが（e.g., Kuzminsky et al. 2018）、今後さらに多様な資料へ適用し、先行研究の成果と比較検討する必要がある。具体的には、3次元データ上で31個の計測点を選び、その計測点にランドマークを配置して、ランドマークの配置関係を検討している（ランドマークの配置場所の詳細はNakao et al. 2023を参照してほしい。図に記載されている番号もそちらと対応している。オープンアクセスなのでアクセスは容易である）。ソフトウェアはR（version 4.2.1）、R studio（2022.07.0+548）、およびRのgeomorphパッケージ（version 4.0.4）を用いた（Adams et al. 2022; R Core Team 2020; RStudio Team 2020）。ランドマークの配置箇所や同様の解析手法については、中川他（2022）、Nakao et al.（submitted）なども参照されたい。

３ 結果（1）

主成分分析の結果、累積寄与率は第13主成分で75%を超える。ここでは寄与率が5%を超える第6主成分までについて検討する。各主成分がどのような変化を捉えているかは図1を参照されたい。第1主成分は得点が大きいほど前後長が長く、後頭部ラムダの高さが低くなる。第2主成分は得点が小さいほど前後長が短く、出っ歯傾向が大きくなり、第3主成分は得点が大きいほどこめかみの位置が高くなり、後頭部が下に下がる。第4主成分は顔面部の上下高などに関係し、得点が大きいほど出っ歯傾向が大きくなり、顔面の前後幅が小さくなる。第5主成分は顔面横幅（得点が大きいほど横幅大）、第6主成分は前後長と上下高（得点が大きいほど両者が大きくなる）を拾っているようである。

主成分分析の結果は図2にプロットした。4つ以上のサンプルを含む行政都市については、確率楕円も表示している。第1・2・6主成分に関してはえびの市、西都市、都城市のサンプルが、第3主成分に関してはえびの市のサンプルのみが比較的形態変異が小さく、よくまとまっている。えびの市のサンプルには島内地下式横穴墓および旭台地下式横穴墓の人骨が多数含まれるが、両遺跡とも微妙に異なる配置を示しつつ、それでもかなりまとまった分布を示している。古墳時代の日本全体で見ると、南九州の古人骨は他の地域とは異なり、かなりの短頭傾向を示すが、その中でも地域差が確認できた（e.g., 松下1990; 内藤1985; Nakao et al. submitted）。具体的には、えびの市の古人骨はどの主成

表1. 資料一覧（計測手法は1: SfM（SONY α 6500）（計測:金田明大),2: Creafrom HandySCAN BLACK™ | Elite（中尾央), 3: Creafrom HandySCAN BLACK（田村光平), 4: SfM(Eos Kiss x8i)（中川朋美)。「*」の資料は鹿児島県埋蔵文化財センター、それ以外は西都原考古博物館所蔵。）

人骨名	遺跡名	性別	年齢	緯度	経度	遺跡所在地	手法	報告書	時期
21号墓1号人骨	島内地下式横穴墓	女性	壮年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
22号墓1号人骨	島内地下式横穴墓	男性	熟年	32.049406	130.785869	えびの市島内	4	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
22号墓3号人骨	島内地下式横穴墓	男性	熟年	32.049406	130.785869	えびの市島内	4	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
24号墓2号人骨	島内地下式横穴墓	女性	熟年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
26号墓3号人骨	島内地下式横穴墓	男性	壮年	32.049406	130.785869	えびの市島内	3	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
29号墓1号人骨	島内地下式横穴墓	女性	壮年	32.049406	130.785869	えびの市島内	3	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
29号墓3号人骨	島内地下式横穴墓	男性	熟年	32.049406	130.785869	えびの市島内	3	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
31号墓3号人骨	島内地下式横穴墓	子供	8～9歳	32.049406	130.785869	えびの市島内	1	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
32号墓1号人骨	島内地下式横穴墓	男性	壮年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
37号墓1号人骨	島内地下式横穴墓	女性	壮年	32.049406	130.785869	えびの市島内	4	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
38号墓1号人骨	島内地下式横穴墓	女性	老年	32.049406	130.785869	えびの市島内	4	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
39号墓2号人骨	島内地下式横穴墓	男性	壮年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
39号墓3号人骨	島内地下式横穴墓	子供	6～7歳	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
51号墓3号人骨	島内地下式横穴墓	不明A	16～17歳	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
52号墓2号人骨	島内地下式横穴墓	女性	16～17歳	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
52号墓3号人骨	島内地下式横穴墓	女性	壮年	32.049406	130.785869	えびの市島内	3	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
62号墓2号人骨	島内地下式横穴墓	男性	熟年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
64号墓2号人骨	島内地下式横穴墓	男性	熟年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
64号墓3号人骨	島内地下式横穴墓	女性	熟年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
65号墓4号人骨	島内地下式横穴墓	不明		32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
89号墓1号人骨	島内地下式横穴墓	男性	熟年	32.049406	130.785869	えびの市島内	4	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
97号墓2号人骨	島内地下式横穴墓	男性	壮年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
97号墓3号人骨	島内地下式横穴墓	女性	熟年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
99号墓1号人骨	島内地下式横穴墓	女性	熟年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
99号墓2号人骨	島内地下式横穴墓	男性	壮年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2001『島内地下式横穴墓』	中期～後期
104号墓4号人骨	島内地下式横穴墓	女性	熟年	32.049406	130.785869	えびの市島内	4	宮崎県えびの市教育委員会2010『島内地下式横穴墓2』	中期～後期
106号墓4号人骨	島内地下式横穴墓	女性	壮年後期	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2010『島内地下式横穴墓2』	中期～後期
110号墓4号人骨	島内地下式横穴墓	男性	熟年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2010『島内地下式横穴墓2』	中期～後期
113号墓1号人骨	島内地下式横穴墓	男性	壮年後期	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2009『島内地下式横穴墓3・岡元遺跡』	中期～後期
113号墓3号人骨	島内地下式横穴墓	女性	老年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2009『島内地下式横穴墓3・岡元遺跡』	中期～後期
113号墓4号人骨	島内地下式横穴墓	子供	3～4歳	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2009『島内地下式横穴墓3・岡元遺跡』	中期～後期
115号墓1号人骨	島内地下式横穴墓	女性	壮年	32.049406	130.785869	えびの市島内	4	宮崎県えびの市教育委員会2009『島内地下式横穴墓3・岡元遺跡』	中期～後期
115号墓5号人骨	島内地下式横穴墓	女性	熟年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2009『島内地下式横穴墓3・岡元遺跡』	中期～後期
118号墓1号人骨	島内地下式横穴墓	女性	熟年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2009『島内地下式横穴墓3・岡元遺跡』	中期～後期
124号墓1号人骨	島内地下式横穴墓	男性	壮年	32.049406	130.785869	えびの市島内	2	宮崎県えびの市教育委員会2009『島内地下式横穴墓3・岡元遺跡』	中期～後期
126号墓2号人骨	島内地下式横穴墓	男性	壮年	32.049406	130.785869	えびの市島内	4	宮崎県えびの市教育委員会2010『島内地下式横穴墓2』	中期～後期
旭台地下式横穴墓群3号墓	旭台地下式横穴墓群	男性	熟年	31.941868	130.983118	西諸県郡高原町	2	宮崎県教育委員会1983『宮崎県文化財調査報告書』第26集	後期前半
旭台地下式横穴墓群3号墓	旭台地下式横穴墓群	不明	成年前半	31.941868	130.983118	西諸県郡高原町	2	宮崎県教育委員会1983『宮崎県文化財調査報告書』第26集	後期前半
旭台地下式横穴墓群9号墓	旭台地下式横穴墓群	女性	壮年	31.941868	130.983118	西諸県郡高原町	2	宮崎県教育委員会1983『宮崎県文化財調査報告書』第26集	後期前半
旭台地下式横穴墓群9号墓	旭台地下式横穴墓群	男性	熟年	31.941868	130.983118	西諸県郡高原町	2	宮崎県教育委員会1983『宮崎県文化財調査報告書』第26集	後期前半
旭台地下式横穴墓群11号墓	旭台地下式横穴墓群	不明	成年	31.941868	130.983118	西諸県郡高原町	2	宮崎県教育委員会1983『宮崎県文化財調査報告書』第26集	後期前半
旭台地下式横穴墓群11号墓	旭台地下式横穴墓群	男性	熟年	31.941868	130.983118	西諸県郡高原町	2	宮崎県教育委員会1983『宮崎県文化財調査報告書』第26集	後期前半
旭台地下式横穴墓群12号墓	旭台地下式横穴墓群	女性	熟年	31.941868	130.983118	西諸県郡高原町	3	宮崎県教育委員会1983『宮崎県文化財調査報告書』第26集	後期前半
旭台地下式横穴墓群12号墓	旭台地下式横穴墓群	男性	熟年	31.941868	130.983118	西諸県郡高原町	2	宮崎県教育委員会1983『宮崎県文化財調査報告書』第26集	後期前半
跡江横穴墓1号	跡江横穴墓	男性	熟年	31.950696	131.381873	宮崎市跡江	2	松下孝幸 1984「宮崎市跡江横穴出土の古墳時代人骨」『宮崎考古』第9号: 34-48.	後期
頭蓋　№4	えびの千人塚供養塔	男性	壮年	32.033124	130.868911	えびの市原田	2		後期
頭蓋　№5	えびの千人塚供養塔	男性	壮年	32.033124	130.868911	えびの市原田	2		後期
34-1	大萩地下式横穴墓群	男性	熟年	31.970508	131.027461	小林市野尻町	4		後期
7-1	菓子野地下式横穴墓群	男性	壮年	31.776848	131.033951	都城市菓子野	2	都城市教育委員会1986『都城市文化財調査報告書4：菓子野地下式横穴・築池地下式横穴』	後期
7-2	菓子野地下式横穴墓群	女性	熟年	31.776848	131.033951	都城市菓子野	3	都城市教育委員会1986『都城市文化財調査報告書4：菓子野地下式横穴・築池地下式横穴』	後期
4-2	小木原・久見迫地下式横穴墓群	女性	熟年	32.033066	130.836713	えびの市上江	2	宮崎県教育委員会1973『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告1』	後期
15	下川東牧之原地下式横穴墓群	男性	熟年	31.747567	131.068886	都城市下川	2	石川恒太郎1973『地下式古墳の研究』	後期
頭蓋骨1	元地原地下式横穴墓群	男性	熟年	32.063202	131.310341	西都市上三財	2	西都原古墳研究所1987『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書2：囲横穴墓・元地原地下式墳墓群』	後期
頭蓋骨2	元地原地下式横穴墓群	女性	壮年	32.063202	131.310341	西都市上三財	2	西都原古墳研究所1987『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書2：囲横穴墓・元地原地下式墳墓群』	後期
頭蓋骨4	元地原地下式横穴墓群	女性	壮年	32.063202	131.310341	西都市上三財	2	西都原古墳研究所1987『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書2：囲横穴墓・元地原地下式墳墓群』	後期
4-1	広畑地下式横穴墓群	女性	壮年	32.054875	130.847872	えびの市坂元	3	えびの市教育委員会1991『広畑遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書第7集	中期～後期
5-1	広畑地下式横穴墓群	男性	熟年	32.054875	130.847872	えびの市坂元	3	えびの市教育委員会1991『広畑遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書第7集	中期～後期
5-2	広畑地下式横穴墓群	男性	壮年	32.054875	130.847872	えびの市坂元	3	えびの市教育委員会1991『広畑遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書第7集	中期～後期
6-1	広畑地下式横穴墓群	男性	熟年	32.054875	130.847872	えびの市坂元	3	えびの市教育委員会1991『広畑遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書第7集	中期～後期
6-2	広畑地下式横穴墓群	男性	熟年	32.054875	130.847872	えびの市坂元	3	えびの市教育委員会1991『広畑遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書第7集	中期～後期
11-1	広畑地下式横穴墓群	男性	熟年	32.054875	130.847872	えびの市坂元	3	えびの市教育委員会1991『広畑遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書第7集	中期～後期
11-2	広畑地下式横穴墓群	女性	壮年	32.054875	130.847872	えびの市坂元	3	えびの市教育委員会1991『広畑遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書第7集	中期～後期
11-3	広畑地下式横穴墓群	女性	壮年	32.054875	130.847872	えびの市坂元	2	えびの市教育委員会1991『広畑遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書第7集	中期～後期
13-2	広畑地下式横穴墓群	男性	熟年	32.054875	130.847872	えびの市坂元	2	えびの市教育委員会1991『広畑遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書第7集	中期～後期
6-2	酒元ノ上横穴墓群	女性	熟年	32.115149	131.389224	西都市三宅	2		後期
5-2	常心原地下式横穴墓群	男性	壮年	32.07157	131.326232	西都市上三財	2	西都市教育委員会2003『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書34：外原遺跡群』	後期
6-3	常心原地下式横穴墓群	男性	壮年	32.07157	131.326232	西都市上三財	2	西都市教育委員会2003『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書34：外原遺跡群』	後期
1	平地下式横穴墓	男性	老年	31.889795	131.057485	都城市大牟田	2	高崎町史	後期
30-2	六野原地下式横穴墓群	男性	熟年	32.021941	131.344797	東諸県郡国富町	2	東諸県郡国富町教育委員会1982『国富町文化財調査資料2：国富町文化財調査資料』	後期
6号墓1号人骨*	中尾地下式横穴墓	M	壮年	31.312326	130.911443	鹿屋市吾平町	2	吾平町教育委員会1998『中尾地下式横穴群』	後期
6号墓2号人骨*	中尾地下式横穴墓	M	壮年	31.312326	130.911443	鹿屋市吾平町	2	吾平町教育委員会1998『中尾地下式横穴群』	後期
2号墓人骨*	北後田地下式横穴墓	F	若年（16～17歳）	31.338083	130.921028	肝属郡肝付町	2		後期

	PC1	PC2	PC3	PC4	PC5	PC6	PC7
寄与率	0.1428	0.0973	0.0864	0.0756	0.0693	0.0516	0.0475
累積寄与率	0.1428	0.2401	0.3265	0.4020	0.4713	0.5229	0.5704

	PC8	PC9	PC10	PC11	PC12	PC13
寄与率	0.0405	0.0351	0.0325	0.0291	0.0230	0.0219
累積寄与率	0.6110	0.6461	0.6786	0.7077	0.7307	0.7526

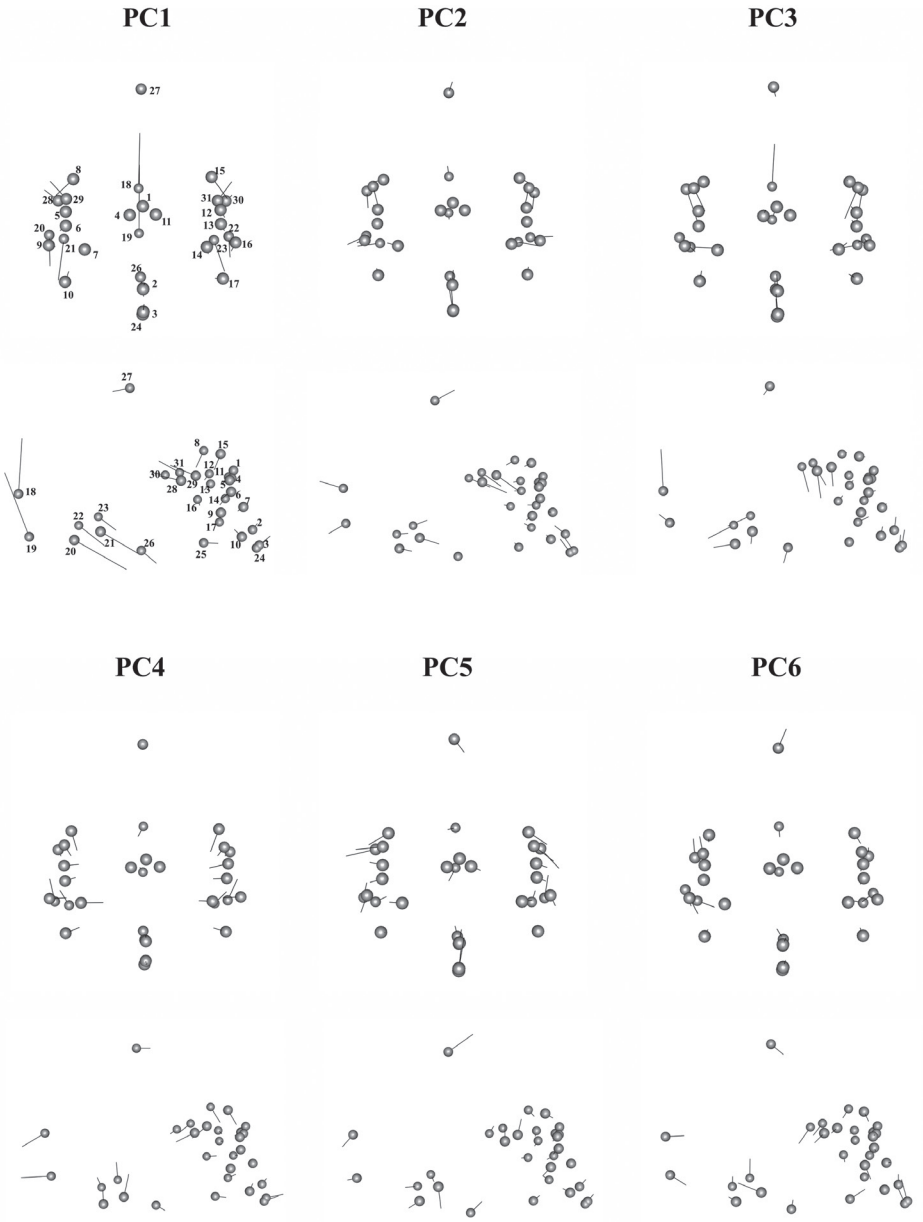


図１：上列から正面，右側面からランドマーク配置を見た図。
ランドマークから伸びた線分が各主成分と関連するランドマークの移動方向および大きさを表す。

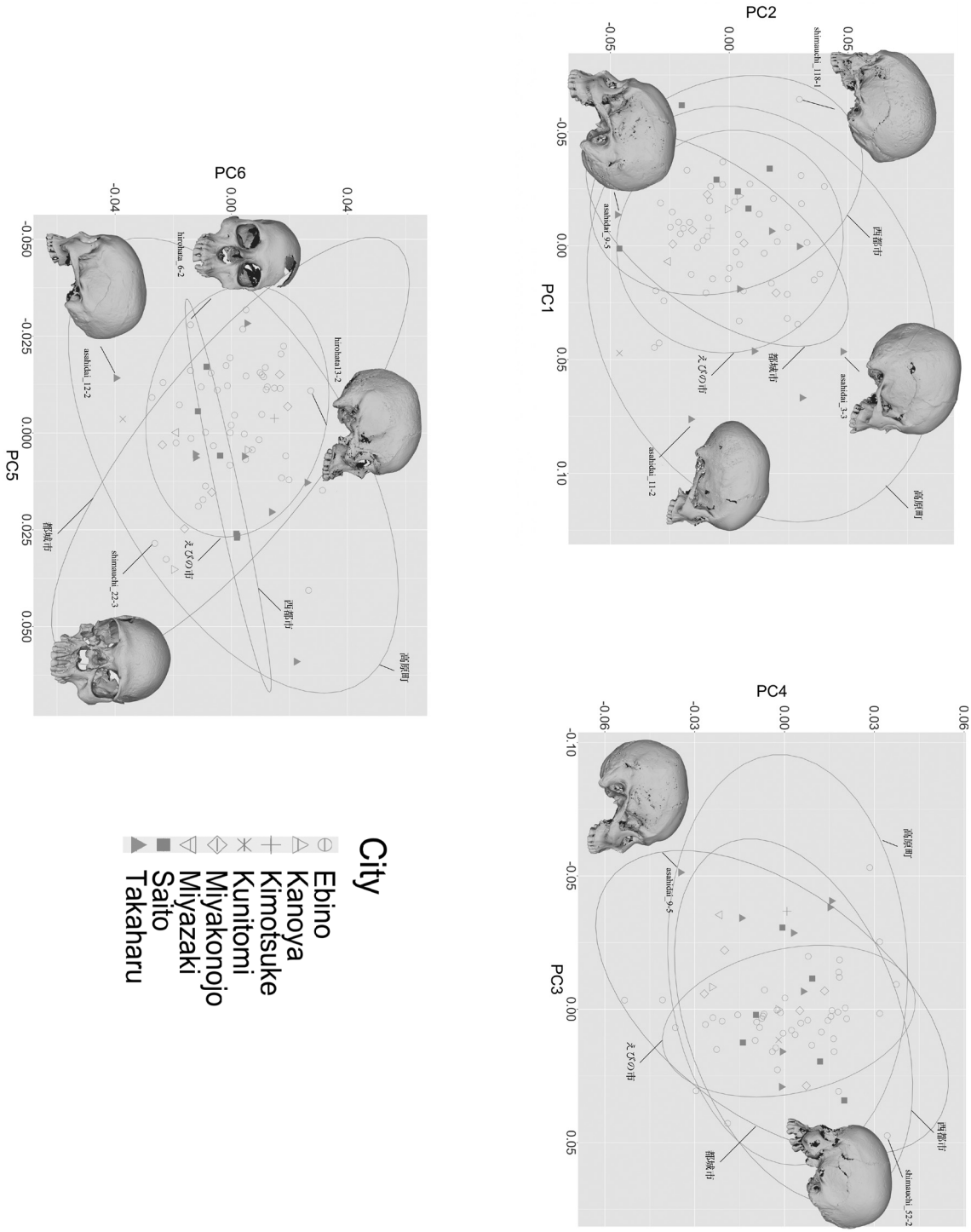


図 2 第 1・2 主成分、第 3・4 主成分、第 5・6 主成分をプロットしたもの。

分でも比較的まとまる傾向にあり、PC6では西都市の変異が小さく、高原市ではPC4以外での変異が、都城市ではPC4～PC6の変異が比較的大きいようである。

４ 考察：3Dデータの解析

幾何学的形態測定学および主成分分析の結果、えびの市、都城市、西都市の人骨が比較的クラスターをつくる傾向があり、また微妙ではあるがそれらの間で地域的な差異を確認できた。残念ながらサンプル数、特に宮崎平野からのサンプルに限りがあったため、従来からの指摘との整合性を確認するには至っていないが（e.g., 松下1990; 内藤1985)、松下（1990）が「南九州山間部タイプ」とまとめていた地域について、より詳細な差異を可視化できた。可能であれば、サンプルをより増やした上での検討を行えればと考えている。

５ 資料と方法（２）

本節では島内地下式横穴墓における受傷人骨に関して、所見を述べる。島内地下式横穴墓における受傷人骨は、古墳時代の中でも受傷人骨が集中している地域といっても過言ではない。先行研究では、受傷状態が詳細に記録されており（e.g., 竹中ほか2001)、何かしらの暴力が存在したことは否定されない。その暴力の性格については、「戦闘」(竹中ほか2010)や、事故・私闘(私怨による傷害行為)(e.g., 竹中・大西2000）など様々な性格が提起されている。ここでは改めて暴力痕跡について詳述したのちに、当遺跡における暴力について若干の考察を加える。

本遺跡における受傷事例は計8体である。このうち、骨自体に傷がみられる事例は6体、武器が共伴すると指摘されている事例は２体である（表3)。次章からは、骨に傷が残る事例（表3:受傷判断のⅱ)、出土状況から暴力を受けた可能性が高い事例（表3：受傷判断のⅲ)、そのほか骨折事例（表3：受傷判断のⅳ）の順で、暴力痕跡について詳述する。

表 3 島内地下式横穴墓群における受傷人骨一覧（藤原 2018 も参考に集成し中川作成)。
受傷判断基準ⅰ～ⅴについては（中川 2021）なども参照。

人骨No.	年齢	性別	受傷有無	受傷判断	受傷箇所数	受傷回数	備考	報告書
23-1	壮年	不明	武器共伴	ⅲ	1	1	腹部に折れた鉄剣1	えびの市教委2001
29-3	熟年	男性	あり	ⅳ	1	1	左前腕骨折1	えびの市教委2001
87-1	熟年	男性	武器共伴	ⅲ	1	1	右骨盤下から破損した骨族1	えびの市教委2001
89-1	熟年	男性	あり	ⅱ	1	1	頭部1	えびの市教委2001
99-2	壮年	男性	あり	ⅱ	10	9	本文参照	えびの市教委2001
104-4	熟年	女性	あり	ⅱ	1	1	右頭頂骨1、治癒痕跡あり	竹中ほか2010
126-2	壮年	男性	あり	ⅱ	1	1	前頭部1、治癒痕跡あり	竹中ほか2010
170-2	壮年	男性	あり	ⅳ	1	1	左前腕骨折1	竹中2020

受傷判断基準	
ⅰ	人骨に利器・武器が残存している場合
ⅱ	利器・武器は遺存していないが、利器・武器によって受けたと考えられる傷が残っている場合
	ⅱ-1 Cut mark
	ⅱ-2 Point insertion or notched defect
	ⅱ-3 Slot fracture
	ⅱ-4 Chop mark
	ⅱ-5 Cut off mark
ⅲ	利器共伴／武器共伴：受傷痕跡は観察できないが、人骨が残存しており、 そこから推定される身体の範囲に武器が残っており体内に嵌入していた可能性が高い場合
ⅳ	防御痕跡（前腕の骨折）
ⅴ	弥生時代における、頭蓋骨のない事例、もしくは頭蓋骨のみを埋葬した事例

6 結果（2）

6.1 暴力痕跡が残る事例（表3の受傷判断iiの事例）

【89-1号人骨】（熟年・男性）

頭蓋骨右前頭部から右頭頂部にかけて1ヶ所を受傷している。治癒痕跡はない。

外板を見ると、受傷部分は同心円状に割れており、特に打点の周辺は一部やや折れ曲がるようして破損している（図3の実線矢印）。このことから骨が水分を保った状況下での打撲であり、治癒痕跡はないことから死亡直前/直後の傷といえる。この衝撃による破損は、前頭面においては打点から正中のやや右を通り眼窩内の範囲に達し、右側面から頭蓋底面に及ぶ（図3の破線矢印）。解剖学的正位の場合、打点の骨の折れ曲がり方から左斜め上から打撃されたと推定できる。頭蓋骨内板においては、衝撃による隆起・破損がみられ、衝撃の回数は1回と考えられる。

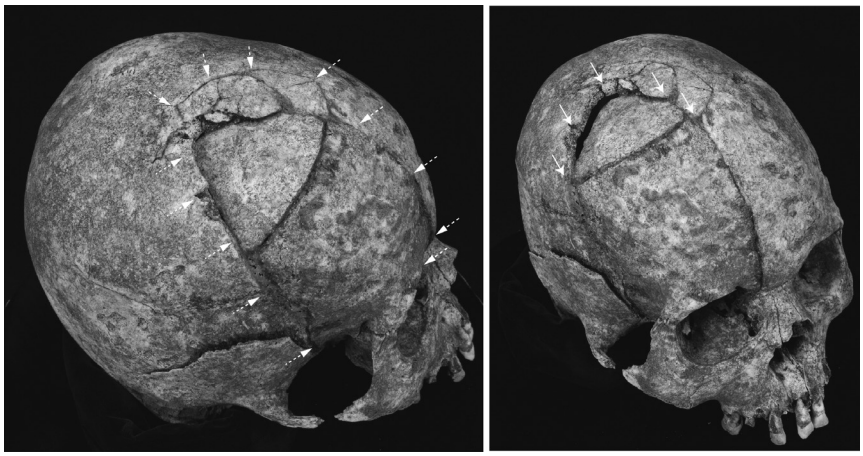


図3 89-1号人骨の打撃痕跡（中川撮影）：打点に伴う破損（実線矢印）と衝撃の範囲（点線矢印）

【99-2号人骨】（壮年・男性）

当遺跡で最も傷の数が多い事例である（図4・5）。合計９ヵ所に暴力痕跡がある。このうち右寛骨の創傷（図5の7・8）は、後述の通り同一線上に並ぶ傷であり、同一の武器でついた可能性がある。頭側から順次述べる。

図5-1：頭頂骨後方ラムダ縫合の上側に1ヶ所の刺突痕跡が残る。背側の左斜め上から刺突されたと推察される。傷の長辺両端はV字状で、創壁の片側に平滑面が残る（図5-1の矢印の範囲）。治癒痕跡はない。

図5- 2：下顎体左側が1ヶ所離断されている。刃の挿入方向が判断しづらいが、下顎底に残る創面・創縁がやや不規則な形状であり、かつ下顎体の外側に残る傷の端部はV字を呈しているため、下顎枝方向から下顎底へと斜めに切り付けられ、下顎底付近が剥離したと考える。治癒痕跡はない。

図5-3：右鎖骨の外側に1ヶ所浅い傷が見られる。創縁の内側、特に頭側は色調が明るいため後世の破損である。創の幅は頭側から広く、脚側方向へと狭く鋭い端部をもつ。治癒痕跡ない。

図5-4：左肩甲骨の背面、肩峰の付け根付近に1ヶ所、端部・断面V字状の傷が見られる。外側から内側に向けて傷つけられたと考えられるが、上腕骨骨頭は残存していないため、刃の挿入時における周囲の破損状況は不明である。治癒痕跡はない。

図5-5：左肋骨（下位肋骨で、おおよそ9番以下）の腹側端部に1ヶ所、傷がみられる。傷の創縁は腹側・

背側ともに破損はなく、他の肋骨には対応するような傷は見受けられない。肋骨の間に入り込むように、やや左斜め方向、頭側から脚側に向けて、刃が嵌入したと考えられる。傷の頭側の面はややめくれており、骨が水分を保った状態でつけられた傷と考えられる。治癒痕跡はない。

図5-6：左腸骨の寛骨臼付近に1ヶ所、端部・断面V字状で平滑面を持つ傷がみられる。大腿骨には傷は見られない。治癒痕跡はない。

図5-7・8：右寛骨の坐骨と寛骨臼付近に1ヶ所ずつ、計2ヶ所の傷がみられる。両傷は腹側と外側で角度が異なっている。つまり、腹側からみると両傷は一直線上にならないが、背側から確認するとほぼ一直線上にあたる。そのため、曲がりやすい素材・厚みの（例えば金属製の）両刃の武器を用いており、刺突の途中で曲がったかあるいは武器を差して抜く際に角がついてしまったといったことが推定される。治癒痕跡はない。

図5-9:右大腿骨の近位に１ヶ所、端部･断面V字状の傷がある。傷の近位側は削れて破損してしまっているが、傷の遠位端壁面には平滑面が確認できる。頭側から脚側に向けて傷がついている。治癒痕跡はない。

【104-4号人骨1)】（熟年・女性）

当遺跡の傷が残る人骨で唯一女性の事例である。背側（右頭骨のラムダ縫合および矢状縫合に近い位置）の孔である（図6の実線矢印）。創縁がやや鈍化しているため刺突の方向が判断しがたいが、創縁の方向で判断するのであれば左斜め上から、外板表面の擦れたような跡（図6の点線矢印）で判断するのであれば右斜め下方向から刺したと推定される。

【126_2号人骨】（壮年・男性）

右前頭部に1ヶ所の暴力痕跡がある（図7の矢印の範囲）。特に創壁右端部では骨収縮と骨増殖、冠状縫合側の長辺の創壁では骨増殖が顕著である。また、創端両端付近を見ると、冠状縫合側の長辺が沈みこみ、手前の辺がかぶさるような形状になっている。竹中ら（2010）の指摘する通り、一定期間生存していたこと、またやや厚みと重みのある武器で、殴打されたといったほうが正確だろう。

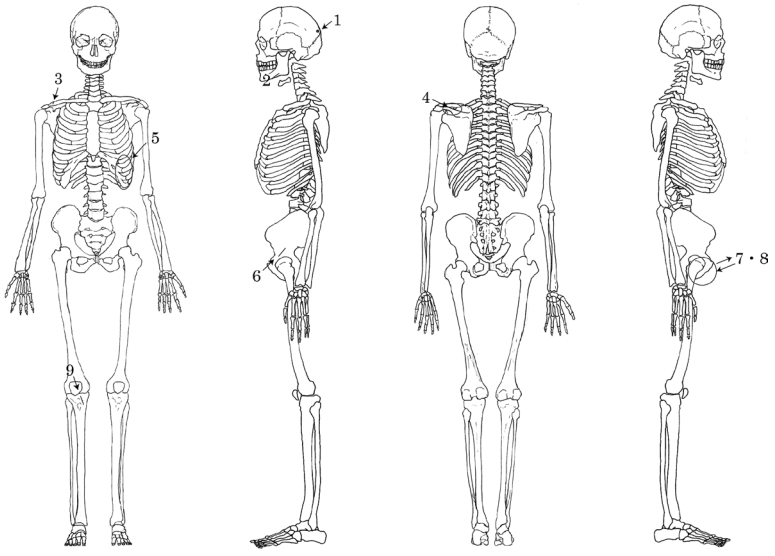
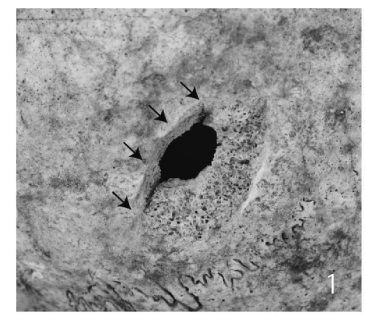
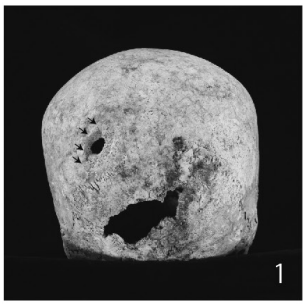
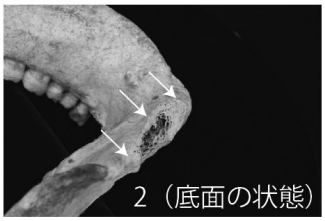


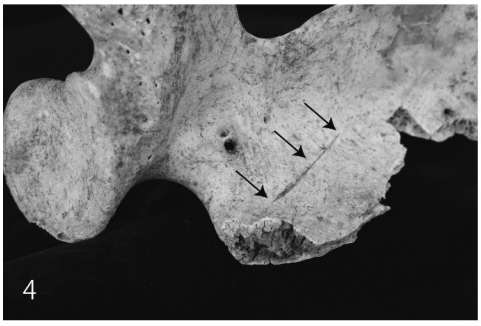
図４　99-2号人骨の受傷位置（矢印はおおよその受傷方向を示す）

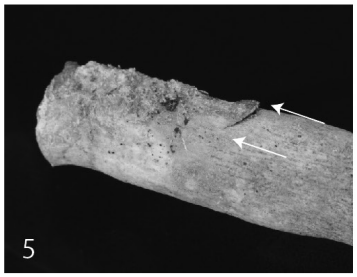


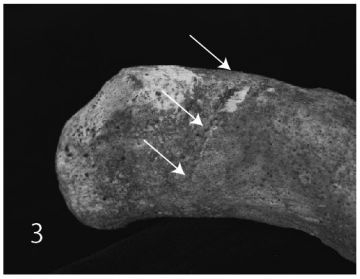


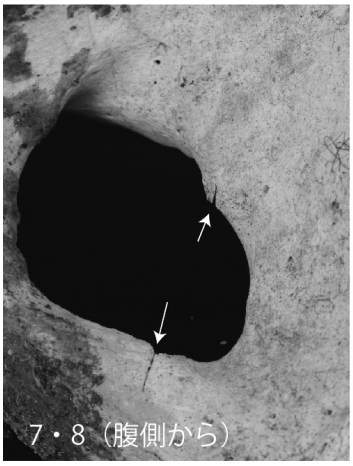


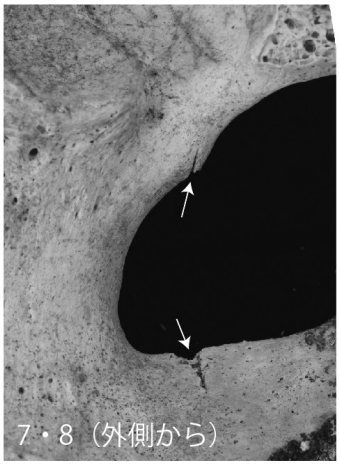
傷No.	受傷部位	傷の位置		傷のタイプ（中川2020に基づく）	治癒痕跡
		冠状面より前面:F、背面:B	矢状面より左:L、右:R		あり:1 / なし:0
1	頭蓋骨	B	L	ii -2 : Point insertion or notched defect	0
2	下顎骨	F	L	ii -5: Cut off mark	0
3	鎖骨	F*	R	ii -1 : Cut mark	0
4	肩甲骨	B	L	ii -1 : Cut mark	0
5	肋骨	F	L	ii -1 : Cut mark	0
6	寛骨	F	L	ii -1 : Cut mark	0
7	寛骨	F*	R	ii -1 : Cut mark	0
8	寛骨	F*	R	ii -1 : Cut mark	0
9	大腿骨	F	R	ii -1 : Cut mark	0

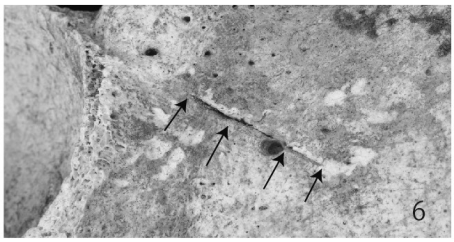












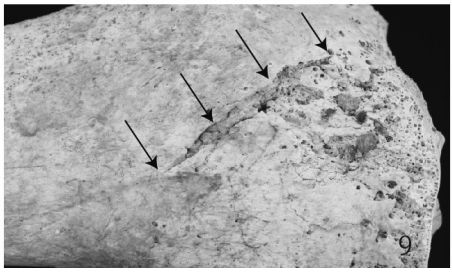


図５　99-2 号人骨の暴力痕跡（中川撮影・作成：写真内の番号は表と対応）

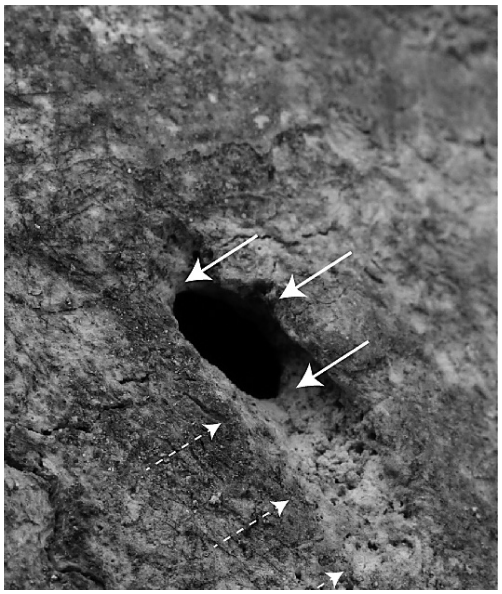


図 6 104-4 号人骨の受傷痕跡（中川撮影）

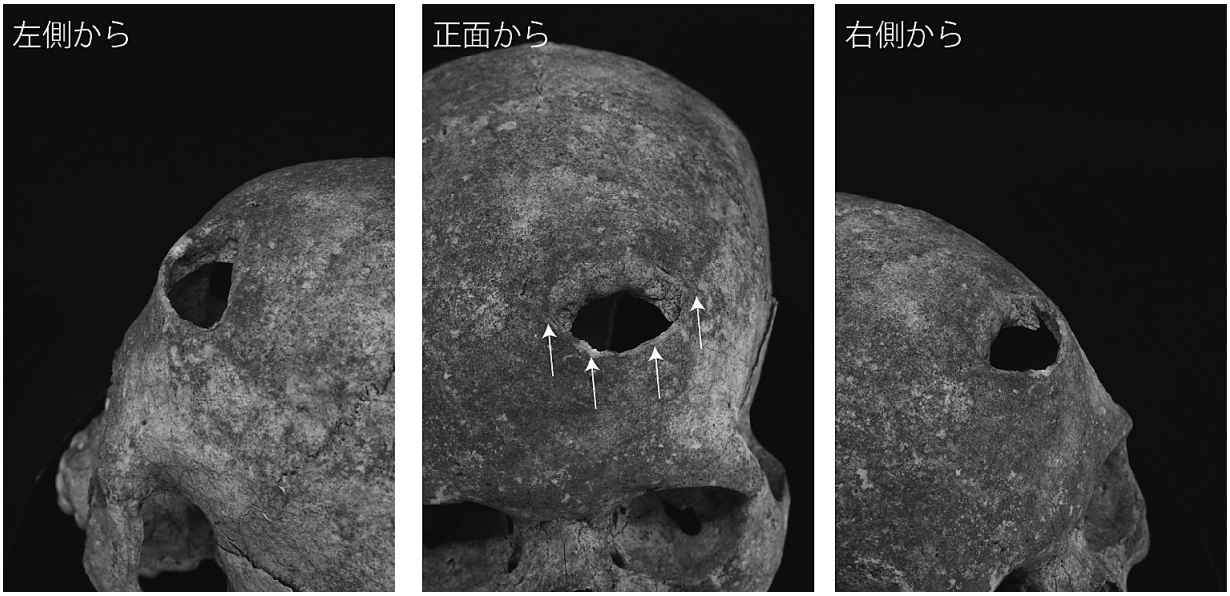


図 7　126-2 号人骨の暴力痕跡（中川撮影）

６．２ 武器共伴の事例

出土状況から暴力を受けた可能性が高いとされる事例は次の2事例である。

【23-1号人骨】（壮年・不明）

腹部から先端が破損した鉄剣切先が出土しており（図8)、嵌入していた可能性が指摘されている（えびの市教育委員会2001：p. 37)。ST-23からは大量の副葬品と、本事例含め計３体の古人骨が見つかっている。23-1号人骨は最も後に追葬され、ほか２体の中でも副葬された武器の数が多いが、これらの武器は遺体と並行に安置されるか、まとめて配されており、鉄剣の出土状況は副葬品とは異なっている。

【87-1号人骨】（熟年・男性）

87-1号人骨の右骨盤下から破折した骨鏃が出土しており（図9)、出土状況から嵌入していた可能性

が指摘されている（えびの市教育委員会2012：p. 36；竹中・大西2000：p. 147；竹中ほか2001）。竹中・大西は戦闘や私闘、事故も考慮しているが（2000：p. 147 L3, p. 150 L6）、致命傷ではないとも指摘する（p. 147 LL4-5）。なお、この事例の後に87-2号人骨（性別不明、5-6歳）が追葬され、この時を含め1回以上玄室が開かれた可能性が指摘されているが、写真や実測図をみる限り右半身の骨盤付近は、骨がおおよそ間接しており大きな攪乱は受けていないと推察する。

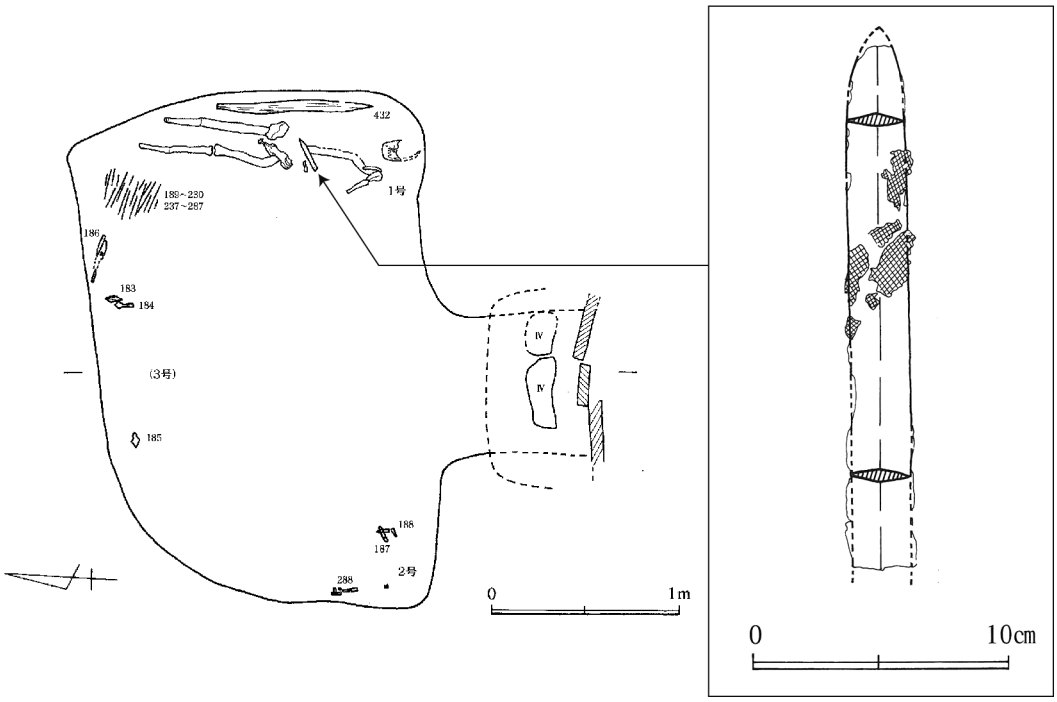


図 8　23-1 号人骨出土状況と共伴する鉄剣（えびの市教育委員会 2001、p. 45、47 より引用、中川が一部加筆）

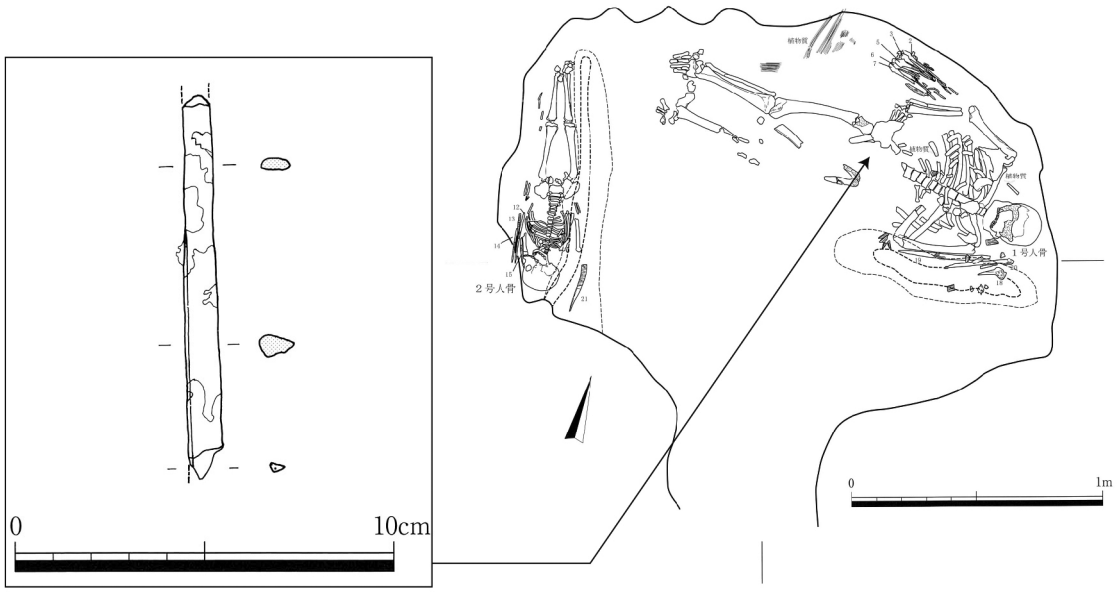


図 9　87-1 号人骨出土状況と共伴する骨鏃（えびの市教育委員会 2012、p. 37、39 より引用、中川が一部加筆）

６．３ このほか骨折痕

【29-3号人骨】（熟年・男性）

竹中ら（2001）によると、左前腕に骨折・治癒の痕跡が残る事例である。左前腕の骨幹中ほどを骨折しており、特に橈骨・尺骨の両端部は著しく変形している。攻撃を防いだ際についたものとしてとらえるのであれば、防御痕跡の例である。

【170-2号人骨】（壮年・男性）

竹中（2020）によると、左橈骨の近位に骨折・治癒が残る事例である。

表 4　島内地下式横穴墓以外の古墳時代受傷人骨（藤原 2016 の表 16 を参考に中川作成）

所在県	遺跡名	時期	性別	年齢	殺傷概要
新潟県	ケラマキ3号墳	後期	男性	壮年	頭蓋、上腕骨、左脛骨に鋭利な刀傷
静岡県	宗光寺横穴墓	後期	女性	壮年	鈍器による頭部穿孔
徳島県	犬山天神山古墳	中期	女性	熟年	頭部右側には刃物傷
鳥取県	(箱式石棺出土人骨)	－	女性	壮年	鈍器による頭蓋への損傷
島根県	沢平横穴群	後期	女性	壮年	左上腕骨外側面に鋭利な傷跡
福岡県	井手ノ上古墳	中期	男性	熟年	左股関節(大腿骨、脛骨)に外傷性疾患
宮崎県	常心原地下式横穴墓群	後期	男性	熟年	鈍器による頭部に陥没骨折

７ 考察：暴力の傾向

以上、計8事例について概略した。先行研究の集成（藤原2013・2016・2018）によると、古墳時代の受傷事例は5体のうち、8事例が島内地下式横穴墓群に集中する（表4)。

まず、暴力がどの程度頻発していたのかを他の時代と比較する。発掘調査報告書（29・49・50・53・54・58集）を参考に、当遺跡の出土人骨を集計した。概算ではあるが、島内地下式横穴墓における出土人骨の合計は372個体、このうち受傷事例は8個体なので、受傷頻度は2.15％（= 8/372×100）である。島内地下式横穴墓の受傷事例の数を、弥生時代の中期における北部九州（52/1612×100 = 3.23%)、そして後期の青谷上寺地遺跡（10/124×100 = 8.06%）とそれぞれFisherの正確確率検定を用い、Holm法によって多重比較を行なった。その結果、Holm法による補正後のp値にもとづけば、島

表 5 受傷事例数の比較

遺跡	受傷	非受傷	合計
島内地下式横穴墓	8	364	372
北部九州（弥生時代中期）	52	1612	1664
青谷上寺地遺跡	10	124	134
総計	70	2100	2170

内地下式横穴墓と青谷上寺地遺跡（p =.0327)、弥生時代北部九州と青谷上寺地遺跡（p = .0435）の間に有意差（p < .05）が見られた（表5)。つまり、島内地下式横穴墓の受傷人骨は一遺跡に集中し

てはいるが、その数と発生頻度は弥生時代北部九州・青谷上寺地遺跡よりも小さいといえる。

次に、どのような人物が暴力を受けやすかったのかをみると、成人以上の男性といえる。前腕骨折の事例（29-3号人骨）を抜いたとしても、男性4人、女性1人である。遺跡内で出土した古人骨全体が著しく男性に偏るというわけではなく、男女比は1：1である（竹中ら2001）。藤原（2013、p. 25）によると、古墳時代の他の受傷人骨出土遺跡では女性の受傷事例がむしろ多いため、島内の受傷者の年齢・性別の傾向は遺跡差である可能性もある。ただし、こうした性別・年齢差が生じる理由としては、暴力（意図的に身体に害を与える行動）を受けるような状況に置かれやすかった人々が男性であった、あるいは女性や子供は暴力の対象外だった、もしくは双方の可能性が考えられる2）。

最後に、暴力痕跡をみると、受傷回数（箇所数）は基本的に1回、骨に傷が残る事例のほとんどに頭部への受傷が見られる。回数/箇所数が 1 回というのは、縄文から弥生の受傷人骨でも一般的なパターンに相当する。しかし、頭部への受傷が多いという傾向は、それ以前の時代では見られない特徴である。特に個体を識別しやすい部位への加害が見られるという点を重視すれば、単に加害するというよりは特定の人物への加害という可能性も考慮すべきかもしれない。

こうした受傷回数に当てはまらないのは、99-2号人骨、すなわち多数回（約4回以上）の受傷事例である。ただし、通常の受傷回数から外れるような事例は弥生時代でも少数例見られる（e.g.，隈・西小田遺跡10-218号人骨、10-159号人骨、新方遺跡3号人骨）。新方遺跡の事例などは、武器や埋葬位置の特異性から戦闘以外の要因（刑罰、儀礼的殺人）を指摘されており（松木2000、pp. 70-71）、本事例もルールがある暴力の可能性も否めない3）。今後、他の類例や考古資料から検討する必要があるだろう。

中川（2021）は、受傷頻度が約3.50%、一時期・一地域に10体以上集中するといった条件をもって、弥生時代中期の北部九州や青谷上寺地遺跡の暴力を、集団を巻き込むような暴力（例えば、戦闘や戦争と表現されてきたようなもの）としている。これはあくまで考古学者あるいは形質人類学で認識できるようなという表現が適切であるが、島内の受傷人骨数（8体）、受傷頻度（2.15%）と統計分析の結果を踏まえると、弥生時代以上の規模の暴力が生じていたとはいいがたい。また、暴力の対象となった人々が成人男性である点は弥生時代の北部九州と類似する一方で、特定部位（解釈の上では特定人物）への加害行為や、ルールがある暴力の可能性を指摘した。

8 結語

本研究では以下二つの考察を行った。（1）頭蓋について3次元計測を行い、得られた3次元データについて幾何学的形態測定学による解析、そして（2）島内地下式横穴墓から出土した人骨に残された傷に関する人類学的検討である。結果として、（1）えびの市、都城市、西都市の資料がある程度まとまり、先行研究の通り、南九州内部での地域差がある程度追認できた。また、（2）傷については複雑な背景が想定され、例えば単純に戦争や集団間紛争のような要因によるものではない可能性を指摘した。

本研究で行ったような、3Dデータを用いた研究はまだ端緒についたばかりである。幾何学的形態測定学の手法を用いてデータを定量化・可視化することにより、さまざまなデータの比較検討が行える

ようになり、こうした検討があって初めて、関連する遺物の背後に働く時空間メカニズムを考察することができる。3Dデータや三次元計測は一見目新しく、注意を引きやすい。だが、そうした目新しさに惑わされるのではなく、今後につながる基礎をしっかりと構築し直していくことが、今まさに必要とされていることである（e.g.，中尾2020、2024)。本論の分析もまだまだ不十分ではあるが、南九州古墳文化を考えるための基礎の一つとなりうることを願っておきたい。

【謝辞】

本研究の元になった古人骨の三次元計測に関して、西都原考古博物館の今塩屋毅行氏には大変お世話になった。感謝したい。また本研究は日本学術振興会科学研究費（No. 19H05738、19H057333、20K00019、20K22029、21K12590、19H04520)，JST（No. JPMJMI20G6)、南山大学2023年度パッヘ研究奨励金の支援を受けた。

【註】

1) 本事例の頭蓋骨は前面から左側にかけて、黒化してひび割れたあるいは白色化した部位が見られる。つまり、火を受けた痕跡が見受けられる。こうした燃焼の痕跡が、追葬で玄室を開閉する際の明かりといった偶発的な産物なのか、もしくは遺体に対する意図的な働きかけかどうかについて述べる力量は筆者にはない。ただし、受傷事例の部分的な燃焼痕跡は青谷上寺地遺跡などでも類例がある。いずれにしても埋葬のプロセスを見る際に、古人骨に残る燃焼痕跡の範囲や傾向は今後の研究の参考になりそうなので、付記しておく。
2) なお、弥生時代の受傷事例は8-9割を成人男性が占める。この点は島内地下式横穴墓群の傾向は弥生の受傷事例と共通性が見られる。
3) ただし、ルールがある暴力か否かは遺跡/地域内から類例が出て始めて検討が可能であるため、類例を検討するとともに事例の増加を待ちたい。

【参考文献】

Adams, D. C., Collyer, M. L., Kaliontzopoulou, A., & Baken, E. K. 2022.Geomorph: Software for geometric morphometric analyses. R package version 4.0.4. https://cran.r-project.org/package=geomorph.

Doi, N. & Tanaka, Y. 1987. A geographical cline in metrical characteristics of Kofun skulls from western Japan. Journal of the Anthropological Society of Nippon, 95(3): 325-343.

えびの市教育委員会. 2001.『島内地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書29.

えびの市教育委員会. 2009.『島内地下式横穴墓群Ⅲ 岡元遺跡』えびの市埋蔵文化財調査報告書50.

えびの市教育委員会. 2010.『島内地下式横穴墓群Ⅱ』えびの市埋蔵文化財調査報告書49.

えびの市教育委員会. 2012.『島内地下式横穴墓群Ⅳ』えびの市埋蔵文化財調査報告書53.

えびの市教育委員会. 2017.『島内地下式横穴墓群Ⅴ 灰塚地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書54.

えびの市教育委員会. 2020.『島内地下式横穴墓群Ⅵ 灰塚地下式横穴墓群Ⅱ』えびの市埋蔵文化財調査報告書58.

藤原 哲. 2013.「古墳時代中期における軍事組織の一側面 ： 島内地下式横穴墓群の分析を中心に」『日本考古学』36：15-36

藤原 哲. 2016.『弥生時代と古墳時代の軍事社会』総合研究大学院大学【博士論文】

藤原 哲. 2018.『日本列島における戦争と国家の起源』東京：同成社.

Howells, W. W. 1973. Cranial variation in man: a study by multivariate analysis of patterns of difference among recent human populations. Papers of the Peabody Museum 67Cambridge, MA: Peabody Museum, Harvard University.

池田次郎. 1993. 古墳人. 岩崎卓也他編『古墳時代の研究 Ⅰ 総論・研究史』、pp. 27-95、東京：雄山閣

城一郎. 1938. 古墳時代人骨の人類学的研究.『人類学輯報』1、pp. 1-324

Kaneda, A., Noshita, K., Tamura, T., Nakagawa, T., and Nakao, H. 2022. A proposal of a new automated method for SfM/MVS 3D reconstruction through comparisons of 3D data by SfM/MVS and handheld laser scanners. PLOS ONE 17(7) e0270660.

Kuzminsky, S. C. Reyes Báez, O., Arriaza, B., Méndez, C., Standen, V. G., San Román, M., Muñoz, I., Durán Herrera, Á., & Hubbe, M. 2018. Investigating cranial morphological variation of early human skeletal remains from Chile: A 3D geometric morphometric approach. American Journal of Physical Anthropology, 165(2):223-237.

松木武彦. 2000.「戦死か刑死か副葬か？：棺内の石製武器からみた弥生社会像」『瀬戸内弥生文化のパイオニア ： シンポジウム新方遺跡からの新視点』, pp. 69-76.

松下孝幸. 1990. 南九州地域における古墳時代人骨の人類学的研究.『長崎医学会雑誌』65(4): 781-807.

森沢佐蔵. 1976. 日本古墳人頭蓋形質の地方差について.『新潟医学会雑誌』90(1): 32-47.

内藤芳篤. 1985. ＜シンポジウム＞国家成立前後の日本人-古墳時代人骨を中心として. 南九州およびその離島.『季刊人類学』16-3: 34-47.

Nakao, H., Kaneda, A., Tamura, K., Noshita, K., and Nakagawa, T. in press. Macro-scale population patterns in the Kofun period of the Japanese archipelago: Quantitative analysis of a larger sample of three-dimensional data from ancient human crania. Humans.

Nakao, H., Nakagawa, T., Kaneda, A., Noshita, K., and Tamura, K. 2023. Demic diffusion of the Yayoi people in the Japanese archipelago. Letters on Evolutionary Behavioral Science, 14(2), 58-64.

Nakao, H., Nakagawa, T., and Yoshida, M. 2022. 3D data of human skeletal remains acquired by two kinds of laser scanners: Einscan Pro HD and Creaform HandySCAN BLACK™ | Elite. Journal of the Nanzan Academic Society Humanities and Natural Sciences, 24: 309-314.

中尾央. 2020.「日本考古学の理論的・哲学的基礎：発掘報告書と型式（学）を中心に」『旧石器研究』16: 1-9.

中尾央（編）2024.『カタチの由来・データの未来：三次元計測の人類史学』東京：勁草書房.

中川朋美. 2021.「青谷上寺地遺跡における暴力の位置づけ」『物質文化』101：105-121.

中川朋美・金田明大・田村光平・中尾央. 2022.「SfMとレーザー計測による古人骨計測結果の比較」『奈文研論叢』3: 39-64.

中川朋美・吉田真優・中尾央. 2022. 岡山県（広島・兵庫県）出土古墳時代人骨の幾何学的形態測定による分析.『古代吉備』33: 43-60.

中園聡. 2017.『季刊考古学』140(特集 3D 技術と考古学)、東京:雄山閣

野下浩司・金田明大・田村光平・中川朋美・中尾央. 2022a.「遠賀川式土器の形態に関する数理的考察 ― 田村遺跡、矢野遺跡、綾羅木郷遺跡を中心に―」『奈文研論叢』3: 65-82.

野下浩司・金田明大・田村光平・中川朋美・中尾央. 2022b.「遠賀川式土器を例とした三次元モデルと二次元実測図データの比較」『情報考古学』27(1/2): 1-10.

Pietrusewsky, M. 2014. Biological distance in bioarchaeology and human osteology. In: C. Smith ed. Encyclopedia of Global Archaeology. Springer, pp. 1-17.

R Core Team. 2020. R: A language and environment for statistical computing. R Foundation for Statistical Computing, Vienna, Austria. URL https://www.R-project.org/.

RStudio Team. 2020. RStudio: Integrated Development for R. RStudio, PBC, Boston, MA URL http://www.rstudio.com/.

城倉正祥.（編）2017.『殿塚・姫塚古墳の研究 人物埴輪の三次元計測調査報告書』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所調査研究報告第 3 冊、東京:六一書房

竹中正巳. 2020.「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群出土の人骨」『島内地下式横穴墓群Ⅵ 灰塚地下式横穴墓群Ⅱ』えびの市埋蔵文化財調査報告書58 付篇.

竹中正巳・柄本優子・下野真理子. 2010.「島内地下式横穴墓群から新たに出土した受傷痕の認められる古墳時代人骨」『鹿児島女子短期大学紀要』45：1-5.

竹中正巳・大西智和. 1998.「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群69・70号墓発掘調査概報」『人類史研究』10：185-189.

竹中正巳・大西智和. 1999.「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群69・70・71・72・73・74・75号墓発掘調査報告」『人類史研究』11：159-188.

竹中正巳・大西智和. 2000.「宮崎県えびの市島内地下式横穴墓群76・77・78・79・87・88・89・90・91号墓発掘調査概報」『人類史研究』12：141-150.

竹中正巳・峰和治・大西智和・小片丘彦・染田英利. 2001.「宮崎県えびの市内島内地下式横穴墓群出土人骨」『島内地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書29 付篇.

寺門之隆. 1981. 古墳時代人骨. 小片保編『人類学講座5 日本人I』、pp. 101-121、東京：雄山閣
Winburn, A.P., & Yim.A-D., and Stock, M. 2022. Recentering forensic anthropology within a multifaceted body of evolutionary theory: Strengthening method by making theory explicit. American Journal of Biological Anthropology, 179(40): 535-551
吉田真優・中川朋美・中尾央. 2023. 朝日遺跡III 11A13区出土人骨の再検討.『あいち朝日遺跡ミュージアム研究紀要』2: 47-61

Geometric morphometrics on 3D data of human crania and an examination on traumas of samples from the Saitobaru Archaeological Museum of the Miyazaki Prefecture

Tomomi Nakagawa, Kohei Tamura, Akihiro Kaneda, Koji Noshita, and Hisashi Nakao

Abstract

The present research examines human skeletal remains stored at the Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture and the Kagoshima Prefectural Archaeological Center in two ways. First, we obtained the three-dimensional data of human craniums and conducted geometric morphometrics using them. The results show that samples from the Ebino Miyakonojo, and Saito city are relatively clustered and regional variations are found to some extent, which is consistent with the previous research. Second, traumas found on the samples from the Shimauchi underground tunnel tombs were examined. The results suggest that the traumas were not possibly due to warfare.

宮崎平野部の中世居館
－出現と展開および歴史的背景－

吉本　正典

１　はじめに

本稿では、旧日向国の中の宮崎平野部に立地する古代末～戦国期「居館」や「屋形」の関連遺跡を小地域ごとに概観し、それらの出現と変化、構築主体（中世前期の国衙在庁系・在地領主、戦国期の大名など地域権力や国衆・土豪といった領主層）や城郭との関係について主に考古学的成果を用いながら考察する。

なお、本稿中での文献をもとにした政治史にかかる記述は、主に『宮崎県史』通史編中世（1998）、および新名一仁による研究成果（新名2014など）に基づいている。

２　中世居館の研究略史

（１）古代から中世へ　～在地領主層の「館」～

古代末には「兵（つわもの）」と称される武芸を生業とする集団が出現し、中世（院政期以降）の武士・武士団に繋がっていくものと考えられている。中世の土地制度は荘園・公領制を基本としており、権力の所在とともに重層的な構造となっていた。武士は領域を囲い込む領域型荘園の管理を足場に、地域の支配層として台頭した。

一方、国衙領などの公領は、かつては荘園が広がることで相対的に重要度が低下したと考えられていたが、平安時代中期には国司が在地に赴かなくなることが一般化し（遙任国司）、国司の代理であった目代と現地の有力者層からなる在庁官人の支配のもとで、中世国衙は交易の中心として発展を遂げた（石井1995）。

（２）中世居館の研究概況

1980年代頃までは、中世前期・鎌倉時代における在地領主たる武士の居館、屋形に関して、周囲を土塁や堀で囲まれた現存する方形居館を典型例として、そのイメージを遡及させて推定がなされていた。その後、発掘調査事例の増加によって研究が進展し、各地の多様かつ複雑な居館の実態が明らかとなった（橋口1986・1990、広瀬1986）。

中井均は近畿地方の遺跡について検討し、平安時代中～後期（概ね11世紀後半）に遡る方形区画の居館を荘園管理のための施設（政所・荘家）と位置づけ、次いで灌漑用としても機能する周濠を掘削するなど､新たな権力たる武士団の荘園への介入や横領を象徴する方形居館の成立（12世紀）を経て、その一部は台地に上がり、あるいは低地にあっていわゆる「平城」として防御性を高め、城郭化に向かうとする変遷案を提示した（中井1991）。さらに、居館と詰城の関係に関して、丘陵上の城郭でも一定程度の居住が行われたことなど、一様でない城郭と居館の在り方に言及している（中井1999）。橘田正徳は、11世紀後半以降に出現する西国の居館と集落との関係について追究し、居館の構築・居住者とされる在地領主（＝武士層）の出現は、11世紀中葉の領域型荘園の成立を契機とすると結論づけた（橘田2013）。

（３）日向国内での調査・研究動向

旧日向国の範囲内では、古代末の国司の館や中世国衙の状況が明確でなく、中世前期の荘園の開発・管理拠点や居館の起源についても研究の進展はみられなかった。そのような中、都城盆地において11世紀代からの荘園（島津荘）開発の進行に伴い、畿内の影響を受けて、現地管理のための方形の区画施設が出現したことを示す調査成果が得られている（都城市教育委員会2022）。都城盆地では、他にも松原地区遺跡や上大五郎遺跡など13世紀以降の方形居館の検出事例がある。宮崎平野部の状況は次章にて述べる。

３　宮崎平野部の中世居館の諸相

（１）公領の中枢・中世国衙の究明に向けて　～妻北地区遺跡群～

日向国の国府は、1990年代末から宮崎県教育委員会が実施した分布調査・確認調査の結果、児湯郡に含まれる一ツ瀬川中流域右岸の稚児ケ池東の低段丘面（妻北地区：第２図）に所在するとの推定に至り、その国史跡指定後に実施された西都市教育委員会による整備・活用目的の確認調査によって、主要建物の構造と変遷が明らかとなった。古代末から中世にかけての状況は未だ不明な点が多いが、断片的ではあるものの当該期の遺構が検出されている。

寺崎遺跡・上妻遺跡　古代律令期（奈良時代末～平安時代前期）の日向国庁は、妻北地区の寺崎遺跡において「品」字形の建物配置が確認され、９世紀中葉に正殿・脇殿が瓦葺・礎石建物化し、囲郭施設が築地塀になったことが判明するなど様相解明が進んだ（西都市教育委員会2020）。

この律令期国庁の建物群は10世紀前半までに廃絶する。その後は、国庁域から浅い谷を挟んで北方に位置する法元遺跡において造成層とみられる固くしまった褐色土層が古代の包含層を覆う状況が認められる。主要域が北方に展開する傾向は明瞭である（吉本2012）。一方、国庁域の東側にあたる上妻地区には日向国の総鎮守であった妻萬社が鎮座しており、12世紀まで国衙の在庁官人として勢力を誇った日下部氏が同社を勢力基盤としていた。法元地区に加えて、東方の上妻地区に古代末の国衙在庁官人の居館があった可能性が指摘できよう。また､国庁域の南東側（現在の妻北小学校北側）にも、９世紀後半～ 10世紀代の掘立柱建物で構成される区域があり、遺構主軸が律令期国庁のそれに近似すること、緑釉陶器や越州窯系青磁が出土していることなどから、国司館や関連施設が存在したものと推測される。

法元（ほが）遺跡　日向国衙の実権は12世紀末には日下部氏から田部氏（土持氏）や伊東氏庶家の田島氏に移り、さらに15世紀前半には伊東氏本宗家が在庁官人を被官化し、妻萬社を実効支配した（福島1991）。このように、遅くとも室町期には武家の地域権力が国衙に進出し、支配するようになったと考えられる。15世紀中葉に児湯郡を本拠地として大淀川流域への進出を本格化させた伊東氏は、島津氏と対抗する上で日向の守護職を求めて対朝廷・幕府活動を行っており（宮地2022）、支配の拠りどころとして、地頭職への補任とともに古代以来の権威を重視したのであろう。

この法元遺跡には「壱丁畑」の地名と方形地割が残っている（第２図）。やや不整形ではあるが、地籍図上では概ね方一町の区画を呈するようにみえる。現在は宅地化の進行によって確認できないが、地元在住の方への筆者の聞き取りでは、かつて縁辺部に土塁状の高まりがあったという。宮崎県

や西都市の教育委員会によって実施された当遺跡内での小規模発掘調査で14 ～ 16世紀代の遺物が出土していること、古代国庁の時期の遺構主軸とは異なり、西に触れた方位に主軸をとる遺構群が検出されること、大きな溝や礫が詰まった竪穴状の遺構がみられることなど、未だ断片的ながら、中世国衙の存在を示唆する資料が得られている（吉本2012）。寺崎遺跡で多量出土した古瓦はほとんど認められない。現在となっては実証がかなり難しいが、踏み込んで言及するならば、上述の「壱丁畑」は中世伊東氏系権力（本宗家ないしは庶家）の館があった可能性も視野に入れるべきであろう。

（２）中世城郭と平地居館 ～新納院～

新納院は現在の児湯郡東部を中心に広がっていた荘園で、島津荘の寄郡。転じて当地一帯の地名ともなっていた。島津荘の一部であるが、天正年間に島津氏が日向を制圧するまでは財部土持氏、のち伊東氏の勢力下にあった。『上井覚兼日記』では新納院と穆佐院を「日州両院」と記しており、天正年間における島津氏の日向国支配の要となっていた。この新納院内には、高城（木城町）と財部（高鍋町）の２か所の拠点城郭がある。

高城・平城　新納院高城は、小丸川の河岸にあって主要街道に接するという戦略上重要な地理的位置にある。

当城は天正６年（1578）の大友氏と島津氏、同15年（1587）の豊臣政権と島津氏の合戦の舞台として紹介されることが多い。一方、中世の当城周辺の状況は一次史料では確認が難しいが、上述のとおりもとは財部土持氏、のち伊東氏の領有する城郭であったと考えられる。主郭周辺の構造として、台地面から東方に向けて突出した丘陵の端部を数条の堀切で区切り、守りを固めている特徴が読み取れる。日向北部の山間部に多い中世城郭の構造である。ただし、現状では西方に続く台地部分の実態が全く分からない。全容把握が課題として残る。

この高城の構造と城域の問題に絡めて、日南市歴史民俗資料館蔵「天正六年高城陣構図」において「平城」と記された一郭に着目したい（木城町教育委員会編2022）。高城の南麓の低地にあって小丸川の河岸にも近い。絵図では内部の様子は表現されていないが、築かれた位置からみて戦国期の高城に在城した、おそらくは伊東氏被官の平常時の館と推定できよう。さらに推測を重ねるならば、新納院の支配を担った在地領主の拠点として、中世前期に遡る可能性もある。例えば南北朝期の『郡司文書』の「日下部盛連軍忠状」にみえる「新納院政所城」は当地を指していたとも考えられる。ただし、現在は宅地になっており、一部に土塁らしき痕跡もみられるものの、考古学的な言及は困難である。

（３）東国御家人の下向と地域権力の本拠　～都於郡～

「都於」はもと郷名で、その地を核として前済院領の荘園・都於院が成立し、のちに都於郡に変化したと考えられている。建久年間成立の『日向国図田帳』では土持氏が地頭であったと記されている。その後、東国御家人の伊東氏が当地の地頭となり、鎌倉時代にはその庶流が日向国での活動を始める。

一方、伊東氏の家史『日向記』によれば建武２年（1335）に本宗家の祐持が都於郡城を築城したとされるが、実態は不明である。次いで貞和４年（1348）に嫡子の祐重（氏祐）が日向に下向する。ただし、当時の同地一帯は木脇氏など庶子家の勢力下にあり、その支配は円滑には進まなかった。荒武氏など、のちの有力被官の尽力によって日向入りが実現したとされる。下って15世紀中葉頃からは本宗家による支配が一応の安定をみたと考えられる。

石野田城　三財川左岸の段丘端部に立地する。段丘崖となる南を除く三方は台地面が続いている。北方は空堀で区切られた様子が確認できる。低地との比高差の面など防御性は決して高いとはいえないことから、居館としての性格を有する場であったと考えられる（第３図）。伊東祐重が建武年間に日向に下向した際に最初に入った「都於郡岩崎之城」に比定されている（若山2000）。ただし、現状で認識できる方形区画の規模は一辺100ｍを大きく超えており、その範囲全てが居館として機能していたのか否かは不明である。

都於郡城　西都市大字荒武と鹿野田にまたがる城館跡で、中世伊東氏の本拠として知られる。中心曲輪群が国史跡に指定されている（第４図）。当城の端緒に関連して、『郡司文書』に「都於郡向城」と記される箇所を若山浩章は現在の都於郡小学校地付近の通称「向城」付近に比定した（若山2000）。一方、三財・石野田側からみて三財川を挟んだ対岸にあたる都於郡城曲輪Ⅰ（三ノ丸）が低地側を見渡すことのできる戦略的に重要な位置にあること、西都市教育委員会による確認調査の結果、曲輪Ⅱ（二ノ丸）において曲輪端部を周回する溝（２号溝）が検出された点にも着目したい。曲輪Ⅱの２号溝は、同教育委員会による確認調査報告書（2015）では近世の遺構とされたが、堆積状況から土塁が嵩上げされた戦国期以前に掘削がなされたと判断できる。この曲輪Ⅱの在り方は台地上に立地する居館（館城）の姿を示している。曲輪Ⅱからは16世紀後半の特徴である口径が大きく、器高が低い土師器杯や染付も出土するが、主体となるのは14 ～ 15世紀の遺物である（第５図）。これら曲輪ⅠとⅡの組み合わせは、筆者の想定する「古段階」（14世紀後半から16世紀前葉まで）の都於郡城の「核」を成す部分と推定できよう（吉本2022）。曲輪ⅠとⅡの組み合わせが、南北朝期の都於郡城築城時に遡る中心施設であったとの仮説を提示しておく。

（４）一ツ瀬川下流域の要衝　～佐土原～

一ツ瀬川下流の要衝である佐土原は、伊東氏庶家にして有力国衙在庁であった田島氏が建立した大光寺と佐土原城を核として繁栄した。三巻本『色葉字類抄』には「那珂府」の記載があり、大光寺に留守所関連の文書が残ることから、12世紀以降に中世国衙機能の一部が所在した可能性が指摘されている。

佐土原城　宮崎市佐土原町にある国指定史跡の城館跡。弧を描く丘陵上に立地する城郭と麓の居館で構成される。

旧佐土原町教育委員会が実施した発掘調査によって、丘陵部山頂の主郭北寄りで天守台遺構が確認されている。出土瓦や石垣の手法から慶長年間後半の築造と推定される（竹中2020）。また、谷部の低地にあたる東麓では寛永２年（1625）に佐土原藩２代藩主忠興の代に築かれたとみられる居館の礎石建物が検出されている。同じ敷地内で掘立柱も確認されており、古段階の遺構が存在した可能性も考慮すべきであろう。ただし、出土した陶磁器類は報告書を瞥見する限りでは17世紀前葉以降のものが主である。現段階では明らかでない伊東氏在城期の主郭および麓の居館の様相解明が待たれる。

（５）大淀川中～下流域・山東　～穆佐城ほか～

のちに伊東氏が勢力基盤とする「山東」（鰐塚山以東の平野部）は、古代末～中世に宇佐宮領や八条院領などの荘園が広範囲に展開し、南北朝期からその支配を巡って争いが多発した。これまでのところ、発掘調査によって得られた知見は多くはない。

穆佐城　地名ともなった穆佐院は島津荘寄郡で、島津氏にとっては日向国の領地の東端にあたり、大淀川南岸に接する交通の利便性から、同氏が日向進出の際に足場とした重要拠点であった。ただし、鎌倉時代以降、明徳２（1391）年に島津元久が補任されるまでは日向国守護は島津氏ではなく、鎌倉幕府北条氏一門の直轄地であり、南北朝期には室町幕府領を保護して南朝方に対抗するために足利尊氏が派遣した畠山直顕（国大将のち守護）が当地に入った。そのような経緯からみて、当所は室町～戦国期には日向の守護所としての性格を有していたと推定される。とはいえ、宮崎平野南部は中世を通して領有権争いが続いたこともあって安定的・継続的開発は難しく、都市的発展までは至らなかったと考えられる。

当城は宮崎市西郊の高岡町に所在し、国史跡に指定されている。縄張り調査によれば曲輪群は大きくは４つのブロックに分けられる（千田1992）。このうち、中央やや東寄りの曲輪群（Ｂ地区）の一段低い東側が室町～戦国期の居館としての役割を担っていたとされている。Ｂ地区西端の高位に位置する主郭において史跡整備の一環で確認調査が行われ、桁行７間の庇ないしは縁付き掘立柱建物が検出されている（宮崎市教育委員会2013）。

山之城　宮崎市街南西部の丘陵上に立地する。伊東氏庶家の山ノ城氏の居城であったとされる。道路建設に伴って山裾に接する低地部で発掘調査が行われ、梁行１間の簡易な掘立柱建物が２棟検出され、13世紀後半の東播系須恵器鉢が出土した。調査報告書（宮崎県埋蔵文化財センター 2008）では、遺物の年代と城郭史上の「大田城」（南北朝期築城）との“ずれ”の解釈に苦心している。城郭の上限と文献の初出年は必ずしもイコールではない。中世前期の領域型荘園支配に関連する施設があったと解してよいのではなかろうか。

発掘調査で確認された方形居館　大淀川河口南岸の下鶴遺跡（宮崎市教育委員会2014）において、12世紀後半～ 13世紀代に築かれた溝や掘立柱建物跡などの遺構が確認されている。溝は箱堀状の断面形を呈することから防御性が決して高くはなく、武士層の居館と決することはできないが、遺物の中に和泉型類似の瓦器椀があるなど一般集落とは明らかに一線を画す遺跡である（第６図）。河口近くの低地にあって赤江湊にも近接する重要な位置にあった荘園（八条院領国富荘）の現地の管理施設、あるいは支配拠点の一部であろうか。詳細は不明であるが、同形態の溝は大淀川中流域の西下本庄遺跡でも確認されている（宮崎県埋蔵文化財センター 1999）。石崎川下流に位置する宮崎市佐土原町所在の囲遺跡（宮崎市教育委員会2020）と大淀川河口近くの北岸低地上に立地する池開・江口遺跡（同2004）の池開地区では方形居館の一部とみられる遺構（溝や掘立柱建物）が検出された。前者は主に14世紀後半～ 15世紀に、後者は15世紀代に営まれたと推定されている。池開地区では河内型の瓦質土器羽釜が出土している（堀田2023）。それらの遺構群は全容が明らかとなってはいないが、池開地区の周濠は一辺半町で、建物規模は一般集落とさして変わるところがないとみてよい。以上の遺跡で注目すべきは、全て海岸近くに位置し、大淀川河口の港津や海岸部を南北に貫く陸路（砂丘列上）に近接する点である。

なお、池開地区や囲遺跡では管状土錘が出土しており、出土量の多い池開地区では、報告書において居館の構築・居住者が漁労などの労働に関わっていたと推定された。池開地区で出土した土錘の全長は3.65 ～ 8.20㎝の幅がある。大型のものは、海浜での漁労活動に用いられたものか。

4　まとめ

（1）国衙系「館」追究の重要性

1990年代末からの日向国府所在地の分布調査・確認調査は古代律令期国府の究明を主目的としたものであり、結果として所期の目的は達成された。加えて当該調査では、既述のとおり法元遺跡を中心に古代末～中世に関する遺構・遺物を多く包蔵していることが明らかとなった。今後は次のステップとして、当該期の居館などの遺構配置や変遷、ひいては地域権力（土持氏や伊東氏）による国衙関与の実態についても追究していく必要がある。

（2）宮崎平野の居館の諸段階

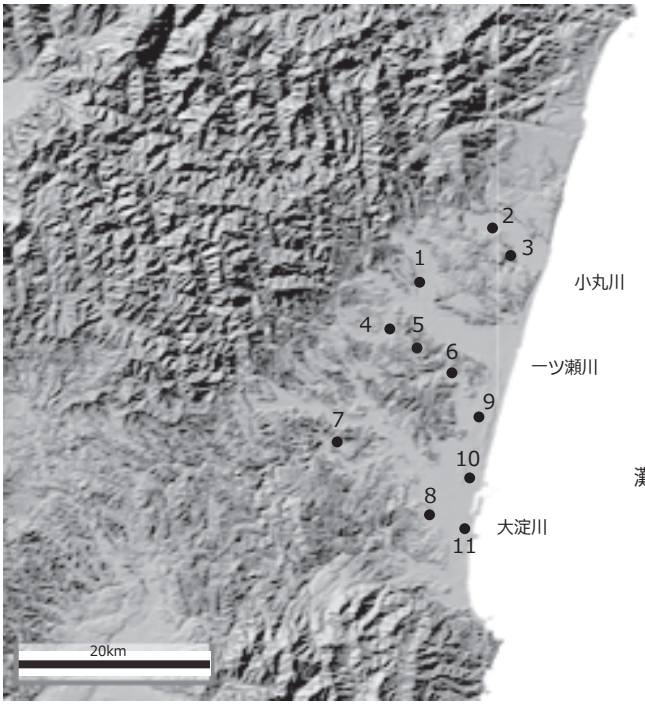
中世前期において「居館」は、在地領主の荘園支配の拠点、室町～戦国期では地域権力や国衆・土豪の主として平常時における居所と位置付けられる。また、前章で概観したとおり、それらの立地や構造などの在り方は、時間の推移に伴う変化に加えて、国衙系、寺社系などを含めた系譜の違いや各々の階層差も絡んで、結果として複雑な様相を示す。このため全容の理解は容易でないが、宮崎平野部における主に在地領主のそれらに関して、現時点で下掲第１表のとおり類型を設定しておく。この類型Ⅰ～Ⅳは、一応は時系列に沿ったものとしているが、いわゆる型式とは異なり、系列とすべき単位となる。年代観は限られた資料に基づいており、不確定部分も多い。

当表中の類型Ⅰ、すなわち中世前期に遡る在地領主の居館とみられる遺構は、宮崎市下鶴遺跡などでの検出例はあるが、とはいえ、当地域においては周溝を巡らせた典型的な方形居館は少数にとどまる可能性が高い。これは条里などの土地区画との関連が希薄である点とも関係があろう。宮崎平野は沖積低地が決して広くはなく、河川の水面から一定の比高差のある低段丘が広がるため、水田に供する水の確保は思いのほか難しい。近世後期以降に灌漑水路が整備されるまでは、用水の供給は谷を堰き止めた溜池が重要な役割を果たしており、それ以外の水田の適地は沖積低地に形成された自然堤防の後背湿地、段丘下の滞水点、海岸砂丘間の湿地などであったとみられる。そのような箇所での水田経営は排水が課題となる。中世前期の方形居館推定地に関しては、低湿地開発の知識や技術を持った鎌倉時代の西遷御家人やその末裔による水田開発への関与が想定されるのではなかろうか。

また、下表の類型Ⅱにあたる居館は、宮崎平野部ではほとんど手掛かりが得られていない。13世紀後半に遡る初期の城郭の確認例はあることから今後の資料蓄積に期待したい。

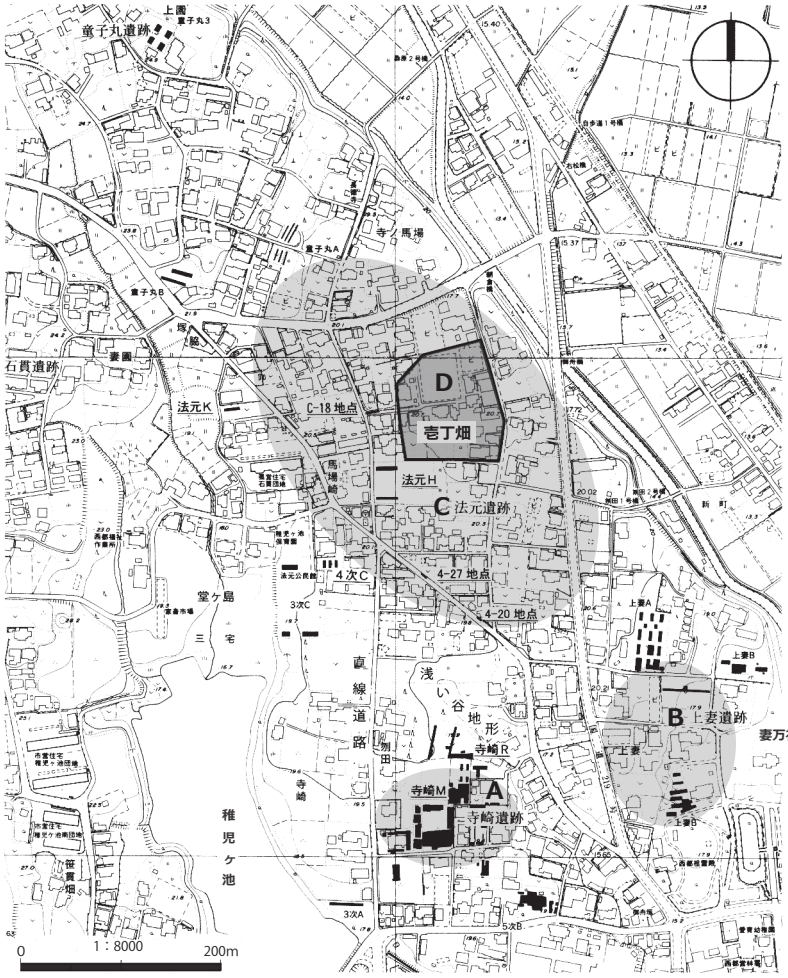
表１　宮崎平野における中世「館」の類型

類型	属性	年代	遺跡・城館跡	備考
Ⅰ	防御性の高くない平地居館	12 世紀? ～	下鶴(宮崎市)・西下本庄(国富町)？	
Ⅱ	丘陵上の城郭とセットの居館	13 世紀後半?～	－	未確認
Ⅲ	周濠・土塁を備えた方形居館	14 世紀後半～16 世紀	池開地区(宮崎市)	
Ⅳa	台地立地型城館を構成する一曲輪		都於郡城曲輪Ⅱ(西都市)・穆佐城曲輪20(宮崎市)	
Ⅳb	館城		今江城(宮崎市)　高平城(日向市)	



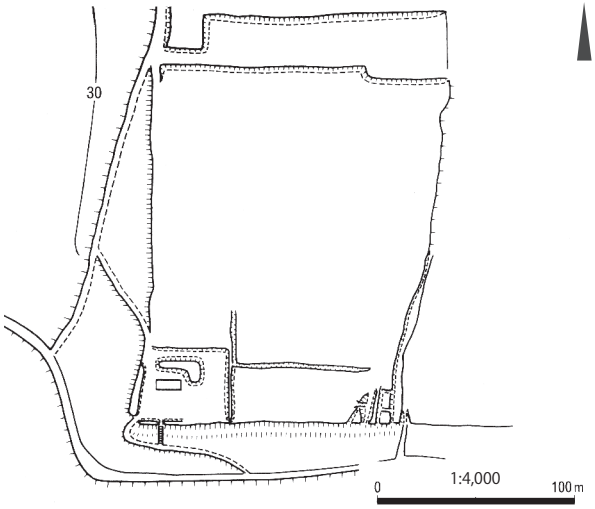
1　妻北地区遺跡群
2　高城・平城
3　財部（高鍋）城
4　石野田城
5　都於郡城
6　佐土原城
7　穆佐城
8　山之城跡
9　囲遺跡
10　池開遺跡
11　下鶴遺跡

第１図　関連遺跡の位置
＊国土地理院 陰影起伏図を使用



A　寺崎遺跡（古代日向国庁）
B　上妻遺跡
C　法元遺跡
D　壱丁畑

第２図　妻北地区遺跡群　＊吉本（2012）に加筆



■畠山直顕軍勢催促状

(伊東)祐廣以下凶徒誅伐事、相催一族等於都於郡向城、可對治彼凶徒也、仍執達如件、

建武四年五月四日　(畠山直顕)(花押)

(盛秀)中右衛門九郎殿

■入田某感状

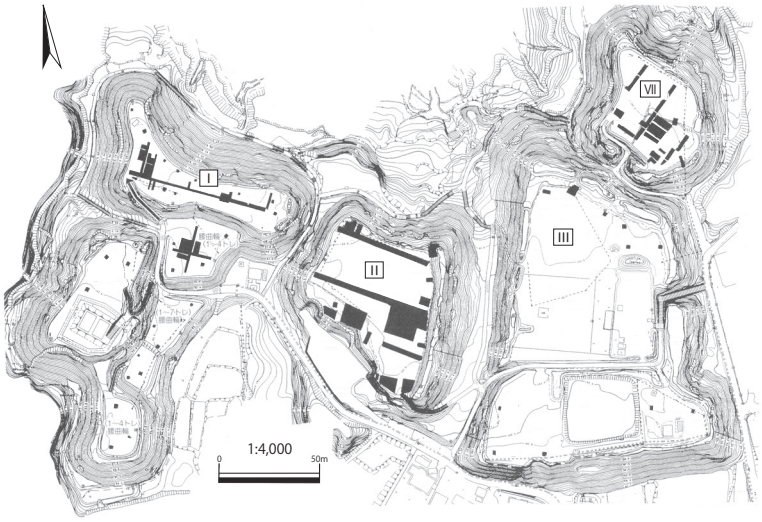
(諸県郡)八代・佐敷野凶徒等、十八日夜寄來都於郡岩崎之城及夜討間、致散々合戦、親類以下手負・打死之段悉検知了、殊抽軍忠之条神妙、仍執達如件、

建武四年六月十九日　(入田)沙弥(花押)

(盛秀)那賀右衛門九郎殿

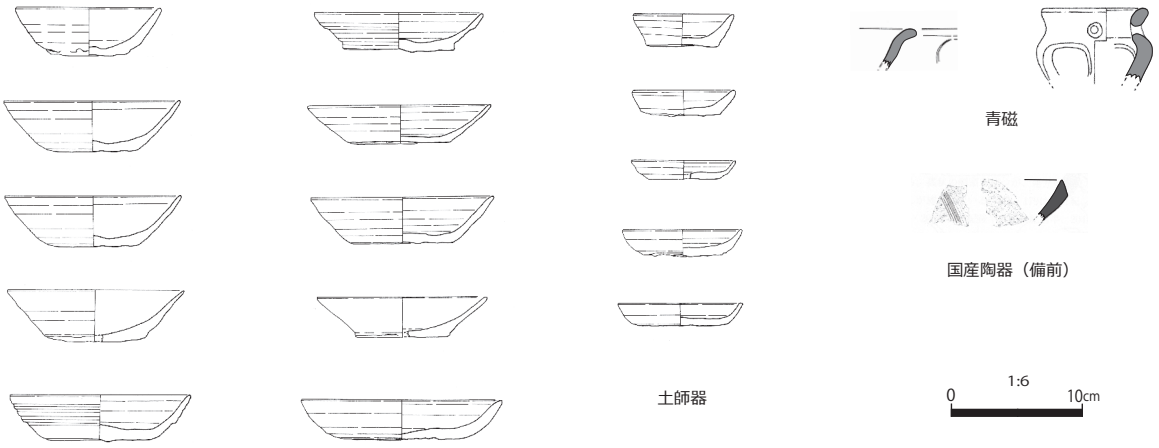
第３図　石野田城跡（略測図）と関連文献

＊宮崎県教委（1999）および『宮崎県史』史料編中世２より

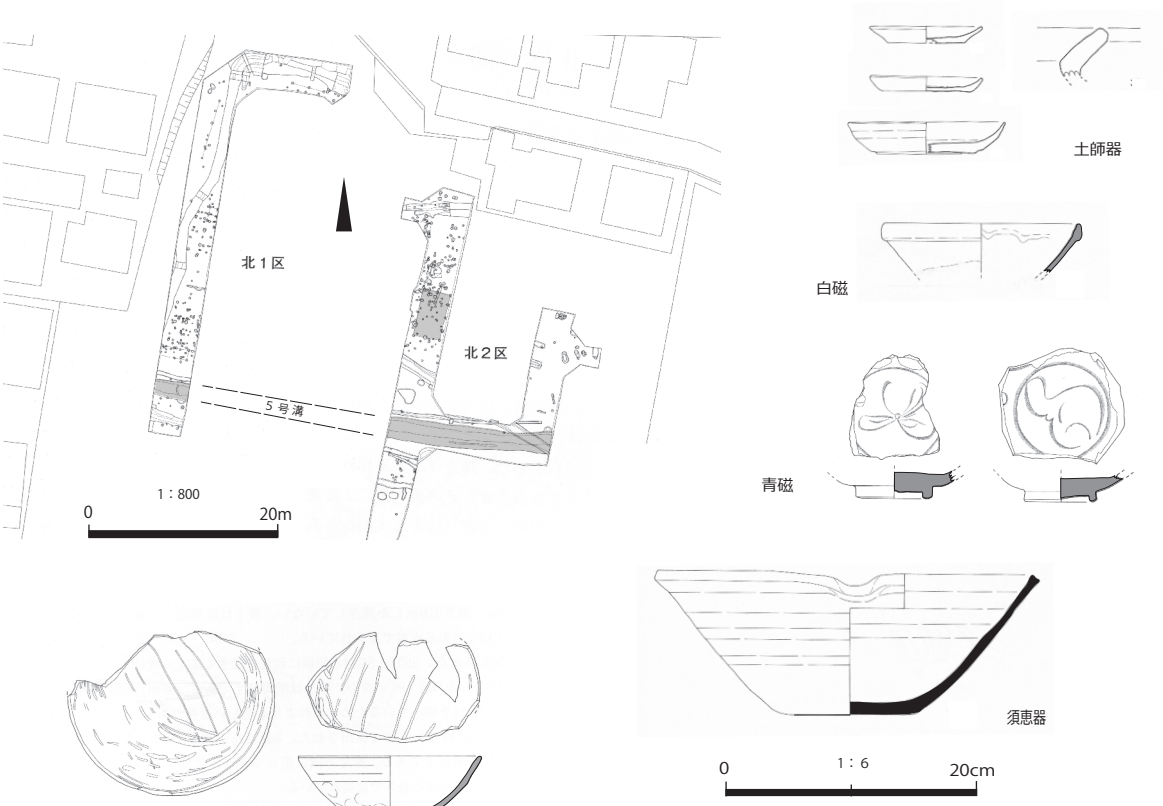


第４図　都於郡城跡 主要曲輪

＊西都市教委（2015）より

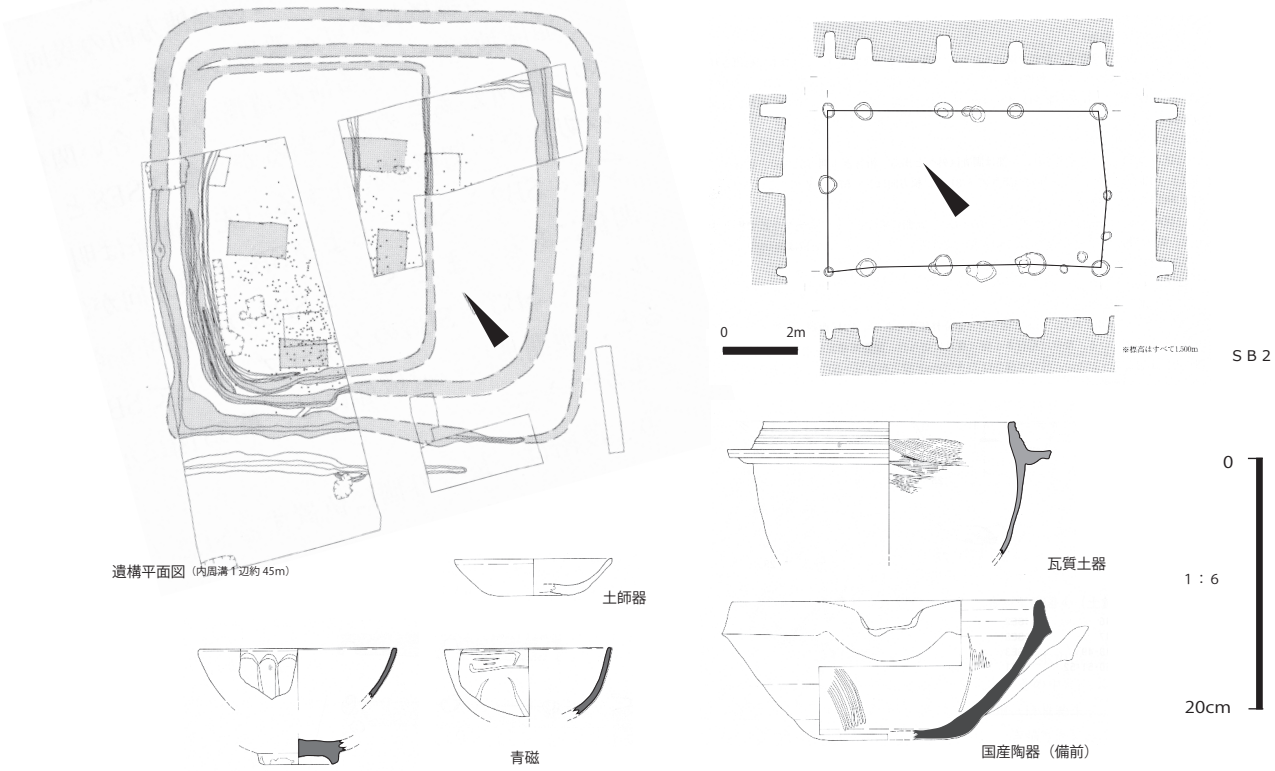


第５図　都於郡城跡 曲輪Ⅱ出土遺物　＊西都市教委（2015）より抜粋



第６図　下鶴遺跡 ５号溝と出土遺物

＊宮崎市教委（2014）より



第７図　池開・江口遺跡（池開地区）遺構と出土遺物　＊宮崎市教委（2004 より）

5　おわりに

本稿は、2023（令和５）年8月19日に西都原考古博物館で実施した特別展関連講座の配付資料をベースとしつつ加筆を行った一方で、日向国北部（縣周辺）と南部（都城盆地・加久藤盆地・飫肥・志布志湾岸）の状況は未消化のため除外した。都城盆地の中世居館跡については、都城市教育委員会刊行『都城市の城館跡』（2019）や、前出の『郡元西原遺跡』（2020）を参照いただきたい。

【引用・参考文献】

石井　進　1995 「地方都市としての国府」『古代から中世へ　中世都市研究２』　新人物往来社
千田嘉博　1992 「特稿 穆佐城址について」『高岡町遺跡詳細分布調査報告書』 高岡町埋蔵文化財報告書２
竹中克繁　2020 「宮崎平野の城郭」『戦国の城と館　九州の中世Ⅲ』 高志出版
橘田正徳　2013 「中世前期における　居館の展開」『古文化談叢』69　九州古文化研究会
中井　均　1991 「中世城館の発生と展開」『物質文化』48　物質文化研究会
中井　均　1999 「居館と詰城」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』９　同研究所
新名一仁　2014 『日向国山東河南の攻防 - 室町時代の伊東氏と島津氏 - 』 鉱脈社
新名一仁　2015 『室町期島津氏領国の政治構造』 戎光祥出版
新名一仁　2020 「戦国期の日向南部」『戦国の城と館　九州の中世Ⅲ』 高志書院
橋口定志　1986 「絵巻物に見る居館」『生活と文化』２　豊島区立郷土資料館
橋口定志　1990 「中世東国の居館とその周辺」『日本史研究』330　日本史研究会
広瀬和雄　1986 「中世への胎動」『岩波講座 日本の考古学』６　岩波書店
福島金治　1991 「室町・戦国期の伊東氏の領国支配について」『宮崎県史研究』５　宮崎県
堀田孝博　2023 「中世後期における九州東岸地域の流通」『中近世土器の基礎研究』30　日本中世土器研究会
宮地輝和　2022 「永禄期足利義輝による伊東氏・島津氏間の和平調停」『九州史学』190　九州史学研究会
若山浩章　2000 「都於郡城覚書」『南九州城郭研究』２　南九州城郭談話会
吉本正典　2012 「寺崎遺跡・法元遺跡と古代末～中世の日向国府」『宮崎考古』23　宮崎考古学会
吉本正典　2022 「台地立地型城館跡編年試論」『九州考古学』97　九州考古学会

【発掘調査報告書等】

木城町教育委員会編　2022 『高城合戦』　鉱脈社
西都市教育委員会　2015 『国指定史跡　都於郡城跡』 西都市埋蔵文化財発掘調査報告書67
西都市教育委員会　2020 『史跡　日向国府跡』 西都市埋蔵文化財発掘調査報告書74
都城市教育委員会　2019 『新版　都城市の中世城館』 都城市文化財調査報告書140
都城市教育委員会　2022 『郡元西原遺跡』 都城市文化財調査報告書149
宮崎県教育委員会　2000 『中近世城館跡緊急分布調査報告書』Ⅱ　詳説編
宮崎県埋蔵文化財センター　2008 『山之城跡』 宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書171
宮崎市教育委員会　2004 『池開・江口遺跡』 宮崎市文化財調査報告書59
宮崎市教育委員会　2013 『史跡 穆佐城跡Ⅰ』 宮崎市文化財調査報告書94
宮崎市教育委員会　2014 『下鶴遺跡』 宮崎市文化財調査報告書101
宮崎市教育委員会　2020 『囲遺跡』 宮崎市文化財調査報告書130

宮崎県西都原考古博物館研究紀要第20号　執筆者紹介

（各章五十音順）

1　犬木　努（INUKI　Tsutomu）
大阪大谷大学　教授

2　今塩屋毅行（IMASHIOYA　Takeyuki）
宮崎県立西都原考古博物館　学芸普及担当　主査

後藤　清隆（GOTO　Kiyotaka）
宮崎県立西都原考古博物館　学芸普及担当　主査

日髙　広人（HIDAKA　Hiroto）
宮崎県立西都原考古博物館　学芸普及担当　主幹

3　金田　明大（KANEDA　Akihiro）
奈良文化財研究所埋蔵文化財センター センター長
兼遺跡・調査技術研究室長

田村　光平（TAMURA　Kohei）
東北大学東北アジア研究センター　准教授

中尾　央（NAKAO　Hisashi）
南山大学人文学部　准教授

中川　朋美（NAKAGAWA　Tomomi）
名古屋大学人文学研究科　准教授

野下　浩司（NOMOTO　Kouji）
九州大学理学部研究院　助教

4　吉本　正典（YOSHIMOTO　Masanori）
宮崎県埋蔵文化財センター　所長

宮崎県立西都原考古博物館研究紀要　執筆要項（投稿規定）

1　執筆者

宮崎県立西都原考古博物館職員及び共同研究者とする。当館からの依頼原稿についてはこの限りではない。（なお、執筆原稿の内容や頁数によっては、掲載しない場合もある。）

2　執筆内容

（1）研究論文・資料紹介　　（2）調査報告　　（3）研究ノート
（4）体験・実験講座成果報告　（5）その他、編集担当者が適当と認めたもの

3　原稿

（1）締切り　1月末日
（2）提出　　データ入稿を原則として、プリントアウト原稿を添付すること。なお、挿入画像はJpegもしくはPng方式とする
（3）校正　　2回

4　執筆要項

（1）体裁
・左綴じ、A4版、横組み、45文字×36行（1620字）、フォントはBIZ UD明朝 Medium 10ｐ。
・図版（図・表・写真）はキャプションを含め、原則として縦24.0cm、横16.2cm以内に収める。

（2）標記
・題名、副題、執筆者名は、５行以内に収める。
・文字は、資料的なもの以外は、原則として現代仮名遣いで新字体とする。
・度量衡単位は、cm、kg、㎡のように記号を、数量は算用数字（２桁以上は半角）を使用する。
・資料キャプションの文字体はゴシック体・センター寄せとする。
・年号は原則として西暦で表記し、和年号が必要な場合は（　）で併記する。
例：2023（令和５）年
・章番号に「.」をつけない。（1.→1）

（3）註・引用、参考文献
・BIZ UD明朝 Medium ８pで記載する。
・文末尾に一括記載する。文末に【引用文献】もしくは【参考文献】
・註は、本文中の引用箇所には、文章の右肩に小括弧を付した番号を記入し、文章末尾にまとめて説明文を記載する。
例：□□[1)]
【註】
1）○○○
・引用、参考文献は、著者明、発行年、「論文名」『書名』、巻号数、発行所、（できれば）頁数を記載する。
例：高橋克壽　1993「西都原171号墳出土埴輪について」『宮崎県史研究』第７号、宮崎県、39 ～ 58頁

（4）その他
・完成時には、本紀要のpdfファイルを作成する。
・抜き刷りはしないが、執筆者が希望する場合、執筆者と印刷業者との交渉により行うものとする。

宮崎県立西都原考古博物館研究紀要　第20号

BULLETIN
Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture
Vol.20

2024年3月31日

編集・発行：宮崎県立西都原考古博物館
〒881-0005　宮崎県西都市大字三宅字西都原西5670番
TEL：0983-41-0041　FAX：0983-41-0051
印　　刷：明巧堂印刷株式会社
〒882-0063　宮崎県延岡市古川町82-10
TEL：0982-33-6327　FAX：0982-33-6316

Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture

Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture

西都原古墳博物館

Research Bulletin

Vol. 20